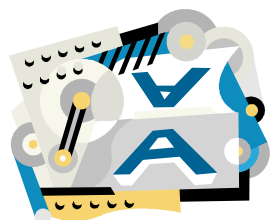


平成 24 年 度

守谷市の学校教育



守谷市教育委員会

今こそ教員としての力を発揮するとき

教育長 後藤 光良

今年度は学校教育に関する問題が吹き荒れた1年でした。通学路の問題、いじめ問題、アレルギー問題、そして体罰等々。私たち教員がもっとも念頭に置かなければならないことは、いずれも児童・生徒の尊い命が失われていることです。しかもどの問題も以前から指摘され、その対応に学校はもちろん、教育界をあげて取り組んできたものばかりであることを私たちは重く受け止めなければなりません。社会は、組織としての学校、教員のあり方を問うています。今こそ私たちは、自分の、自分たちの問題として受け止め、児童・生徒、保護者、社会と正対し、真摯に取り組んでいかなければならないと考えます。

さて、学習指導要領が全面実施され、中学校は1年目、小学校は2年目を迎え、学習指導要領の理念が生かされた授業や教育活動が各学校で展開されていたと思います。しかし、一部では旧態依然の授業や児童・生徒対応が相変わらず見られました。学級経営と授業は相関関係にあるといわれますが、まさにそのとおりであると痛感しています。今年から市の事業として「若手教員育成講座」を開設し、ベテラン教員の授業を参観、協議する機会を設けました。参加者の若手教員は、すばらしい授業はすばらしい学級経営が基本であることを実感できたことと思います。また、常に学ぶ姿勢を失わないことも指導者として必要なことであることが理解できたことと思います。

守谷市では、学習指導要領の趣旨を受け、学校・家庭・地域が連携し、すべての子どもたちに「新しい時代をたくましく生き抜く力」の育成を図るため、「守谷市学校教育プラン」を策定してきました。具現化にあたっては、5つの重点課題を設定し、各学校において地域や児童生徒の実態に応じながら創意を生かした教育実践を推進されるようお願いしてきました。「守谷市の学校教育」は、上記プランをふまえた小中連携教育・情報教育・環境教育・外国語教育（活動）等、時代の要請を受けた課題に対し、各学校が特色ある学校づくりを目指してきた実践の事例集です。新年度は、これまでの成果や課題を踏まえ、新たな教育プランをスタートしていきます。

子どもたちの成長に果たす学校教育の役割、教員の存在意義が問われていますが、その重要性も再認識されたものと思っています。そのためには私たちも成長していかなければならないし、諸課題に謙虚に向かわなければならないと考えています。今こそ、教員としての力を発揮するときです。守谷市の子どもたちが、「元気のある、社会に貢献できる人間」に育つよう力を尽くしていきましょう。

本年度の各校の真摯な取組に敬意を表しつつ、平成25年度の更なる前進、向上のため、この「守谷市の学校教育」が多くの先生方に読まれ（教員以外の方にも読まれています）、教育実践の資料として活用されることを期待しています。

守谷市教育全体図

守谷市民憲章

- ・ 水と緑に親しみ、自然を愛し、美しいまちをつくります。
- ・ 豊かな心を育て、体をきたえ、健康なまちをつくります。
- ・ 教育文化を高め、個性を伸ばし、うるおいのあるまちをつくります。
- ・ 明るい家庭をきずき、きまりを守り、平和なまちをつくります。
- ・ 互いに助け合い、責任を果たし、生きがいのあるまちをつくります。



守谷市総合計画



守谷市の教育目標



茨城県学校教育指導方針

新しい時代をたくましく生きぬく人づくりを目指して

- 1 思考力、創造力に富み、正しく判断して実行する人間の育成
- 2 個性を伸ばし、豊かな心をそなえた、基礎的・基本的な知識をしっかりと身につけた人間の育成
- 3 生涯にわたって、知識や教養を磨き、社会の発展に貢献する人間の育成
- 4 家庭・地域の教育力を高め、互いに助け合い、学び合う人間の育成

社会教育（生涯学習）

共通課題

新しい時代をたくましく生きぬく人づくり

学校教育（基礎教育）

義務と責任を果たす心豊かな人づくりを推進する社会教育

学力と安全と成長を保障する学校教育

生涯学習課事業

図書館事業

給食センター事業

学校教育課・指導室事業

- 1 豊かな生活をめざした学習機会の充実と人材バンクを活用する。
- 2 学校、家庭、地域社会の連携による教育を推進する。
- 3 学習活動の発表の場及び芸術・芸能鑑賞の場の提供と地域交流の拠点としての公民館活動を推進する。
- 4 健康づくりの推進とスポーツ活動の充実を図る。
- 5 郷土愛を深めるため、文化財の保存及び周知を図る。
- 6 放課後子どもプランの充実と児童の安心・安全の確保に努める。

- 1 すべての市民に、気軽にいつでも気持ちよく利用される図書館を目指す。
- 2 市民の知的欲求を保障し、日常生活に生かすため図書館機能の強化とサービスの充実を図る。
- 3 施設や設備は安全に留意して、誰にでも使いやすい図書館を目指す。

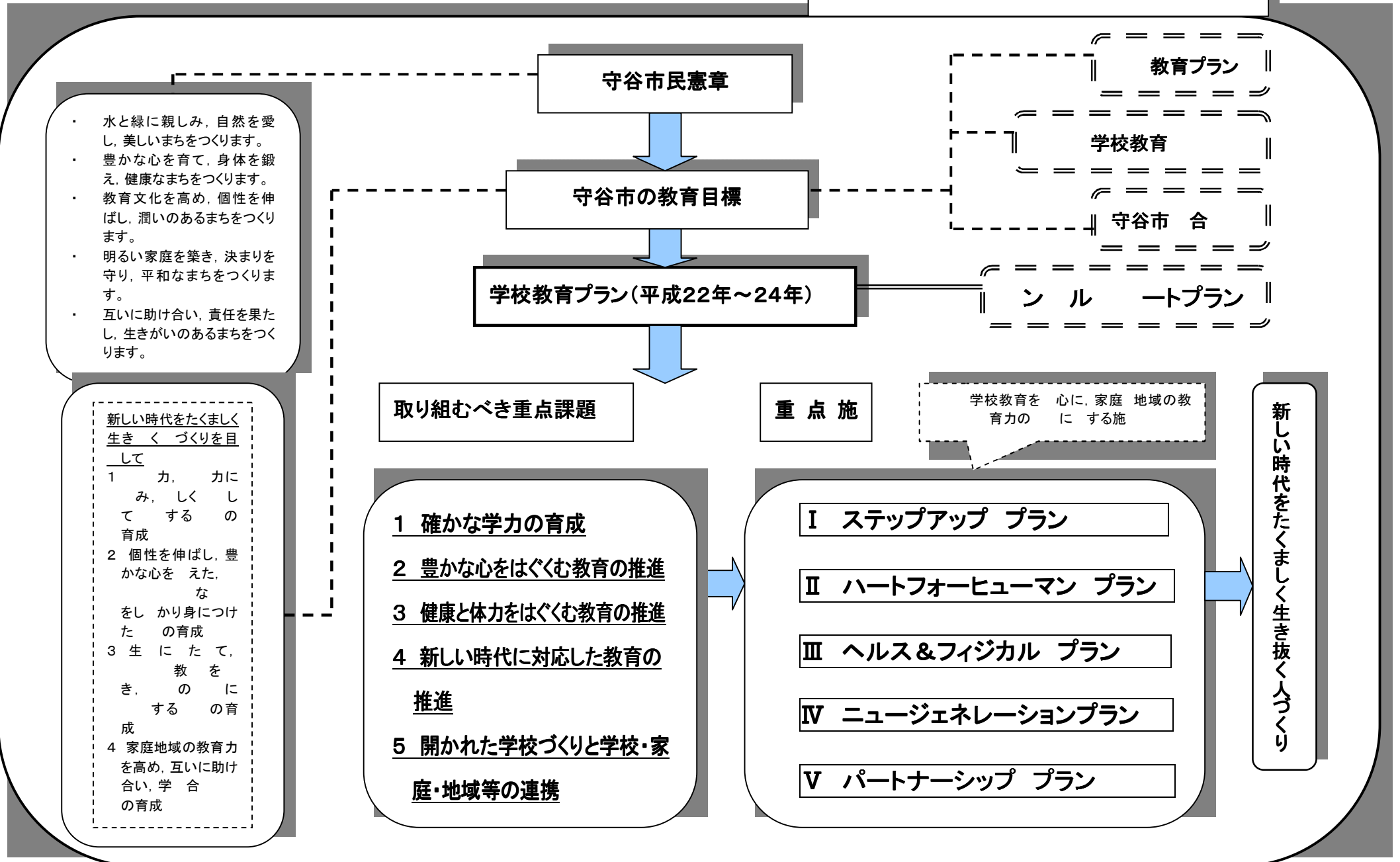
- 1 正しい食習慣の形成、好ましい人間関係の育成、栄養管理と健康増進、食の在り方について教育の一環として給食を実施する。
- 2 学校給食を安全に安定して供給するため、徹底した衛生管理を行う。

- 1 児童生徒が快適な環境のもとで学習できるようにするとともに、登下校時の安全確保や不審者侵入に対する対応等、学校の危機管理体制の確立を図る。
- 2 新しい時代をたくましく生きぬく人づくりを目指し、以下の学校教育プランを推進する。
 - ① ステップアップ プラン
 - ② ハートフォーヒューマン プラン
 - ③ ヘルス&フィジカル プラン
 - ④ ニュージェネレーション プラン
 - ⑤ パートナースhip プラン

平成24年度守谷市学校教育プラン全体図

教育プランの目的 教育システム

の に対応するとに 市の を まえ、市民の に応える
教育施 を 施すると 家庭・地域 の教育の取り組み を し、
市民自 が の教育に ていく教育システ の を目 す。



平成24年度 守谷市学校教育プラン

I ステップアップ プラン（確かな学力の育成）

児童生徒に確かな学力を身につけさせることは、学校教育にとって最重要課題であります。確かな学力の育成のためには、児童生徒が自ら学習する喜びを実感して、学び続けることが大切です。学校は学習指導要領に基づき、基礎的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の育成を図るとともに、地域や子どもの実態に応じた特色ある学校づくりを積極的に進めます。

- ◇ 基礎的・基本的な知識の確実な習得と指導法の工夫・改善
- ◇ 思考力・判断力・表現力の育成と学習意欲の向上
- ◇ 個に応じた教育の積極的な推進
- ◇ 特別支援教育の充実
- ◇ 読書活動の積極的推進

II ハートフォーヒューマン プラン（豊かな心をはぐむ教育の推進）

近年、規範意識や道徳性の欠如等の問題が叫ばれています。こうした問題の解決のため、他人を思いやる心や倫理観、責任感等の育成を図り、心豊かな児童・生徒を育てます。

- ◇ 基本的行動様式の徹底指導と基本的生活習慣の確立
- ◇ 道徳教育の充実と豊かな人間性の育成
- ◇ 「ゼロトレランス」の考えを取り入れた生徒指導体制の構築
- ◇ 一人一人を大切にし、明るい社会を築いていくとする人権教育の推進
- ◇ 教育相談体制の充実

III ヘルス&フィジカル プラン（健康と体力をはぐむ教育の推進）

子どもたちの体力低下が著しいといわれています。その解決のために、「食に関する指導」や「体力づくり」を進め健やかな児童・生徒を育てます。また、子どもたちの安全は教育活動を支える最重要課題であります。安全についての考え方を子どもたちに周知徹底するとともに、安全確保のための万全な体制をつくり、安全安心の学校づくりを目指します。

- ◇ 体力の向上
- ◇ 健康教育の充実
- ◇ 危機管理体制の確立と安全教育の実施
- ◇ 食に関する指導の充実

IV ニュージェネレーション プラン（新しい時代に対応した教育の推進）

21世紀を生きる子どもたちには、新しい時代に対応した教育が必要です。守谷市においては、子どもたちが自らの力で将来を切り開いていくために必要な、外国語教育・情報教育・環境教育・キャリア教育の充実を図ります。

- ◇ 国際理解教育の充実と英語力の向上
- ◇ 外国語教育の小中連携と充実
- ◇ 情報教育の推進とコンピュータ活用能力の向上
- ◇ 環境教育の推進
- ◇ キャリア教育の推進

V パートナーシップ プラン（開かれた学校づくりと家庭・地域等の連携）

児童生徒にとって、学校・家庭・地域は大切な学びの空間です。いま、それぞれの独自性を生かしながら連携していくことが望まれています。学校は積極的に情報を公開することで、信頼される学校づくりを進めるとともに、家庭・地域と連携し、みんなで子どもたちを育む教育のシステムづくりを推進します。

- ◇ 地域社会への授業公開と積極的情報発信
- ◇ 特色ある学校づくりの推進
- ◇ サポートチーム（生徒指導連絡協議会）による生徒指導体制の充実
- ◇ 地域ボランティアとの連携による登下校時の児童生徒の安全確保体制の確立
- ◇ 「学校運営協力員会議」の充実と学校評価の活用
- ◇ 幼・保・小・中・高の連携教育の推進

守
谷
の
教
育

各校の特色ある取組み



平成24年度守谷市小中学校研究主題一覧

学 校 名	教科・領域	研 究 主 題
大井沢小学校	国語科	自分の考えをもち、表現できる児童の育成 ～伝え合う力を高める国語科学習指導の工夫～
大野小学校	算数科	自分の考えをもち、自分の言葉で表現できる児童の育成 ～算数的活動の充実を通して～
高野小学校	全教科	生きる力を育てる指導法の追究
守谷小学校	算数科	主体的に学習に取り組み、自分の考えや思いを表現できる 子どもの育成 ～算数的活動の工夫を通して～
黒内小学校	算数科	論理的な思考力を育成する算数科学習指導のあり方 ～算数的活動の充実を通して～
御所ヶ丘小学校	国語科	思考力・判断力・表現力をはぐくむ国語科学習指導 ～「読むこと」における単元を貫く言語活動の充実を通して～
郷州小学校	全教科	言語活動を充実し、豊かな表現力を育てる指導の工夫 ～書くこと、伝え合うことを中核として～
松前台小学校	国語科	文章を正しく読み取り、自分の考えを表現できる児童の育成 ～「読むこと」の指導を通して～
松ヶ丘小学校	算数科	自ら考えをもち、進んで伝え合う児童の育成
守谷中学校	全教科	知識・技能の習得や活用を図り、思考力・表現力を育成する 指導と評価の在り方 ～自己肯定感と基礎学力の向上を目指して～
愛宕中学校	全教科	習熟が不十分な生徒への指導方法 ～個人差に応じた指導方法と評価の工夫改善～
御所ヶ丘中学校	全教科	表現力を高める授業の創造 ～教科等の特性を生かした言語活動の工夫を通して～
けやき台中学校	全教科	主体的に考え、表現しようとする生徒を育成する学習指導 の在り方 ～各教科科における言語活動を通して～

自分の考えをもち、表現できる児童の育成 ～伝え合う力を高める国語科学習指導の工夫～

守谷市立大井沢小学校

1 はじめに

本校では、生きる力をはぐくむという理念の具現化を目指し、標記の研究テーマのもと、国語科の学習指導を中心として言語活動の充実に努めている。研究3年目となる今年度も、知のプロジェクトを中心に「伝え合う力」を高めることを重点として研修を進めてきた。

2 研究テーマ設定の理由

小学校学習指導要領（国語編）に、「伝え合う力を高める」とは、「人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、ことばを通して適切に表現したり、正確に理解したりする力を高めること」とあり、このことから、「伝え合う力」の向上は、国語科の中の重要な指導事項である。この考え方をもとに、「伝え合う力」の向上を目指した学習指導の工夫を研修の柱とし、本研究テーマを設定した。

3 研究の仮説

【仮説1】 育てる

国語科の授業づくりにおいて、言語活動を重視した単元構想を工夫し、主体的に学ぶ場を設定していけば、自分の思いや考えをもつこと、表現していこうとする意欲につながるであろう。

【仮説2】 深める

国語科の学習において、ペア活動やグループ学習などを効果的に取り入れていけば、相手の思いや考えを大切にしながら聞き、自分の思いや考えを話し、互いに深め合うことで、「伝え合う力」が育つであろう。

【仮説3】 広げる

国語の学習で培った言語力や表現力を、他教科や様々な活動でも生かしていく場を充実させていけば、思いや考えを広げ、日常生活で活用できる「生きる力」に結びついていくであろう。

4 研究の方法

○各ブロックごとに目標を設定し、具体的な実践計画を立て、研修を進める。

低学年	ことばに関心をもち、自分の思いや考えを楽しみながら表現したり、相手の思いや考えを聞いたりすることができる児童を育てる。
中学年	いろいろなことばの意味を知り、言語の幅を広げながら自分の思いや考えを表現したり、相手の思いや考えと比べたりすることができる児童を育てる。
高学年	適切なことばを選んで交流し、自分の思いや考えを深め、工夫して表現することができる児童を育てる。

5 研究の内容

研修予定日	形態	研修の主な内容
5月 7日	全体→ ブロック	①研究の仮説、ブロック目標、年間計画について検討 ②提案授業についての検討 ③一般研修（夏休み）の内容についての話し合い ④ブロック間での国語のノートに使い方についての情報や意見の交換
6月 4日 ～ 8日	ブロック	提案授業者の授業についての検討
6月14日	市国語部研究会と兼ねて	提案授業(1) （3の1 福山明美教諭） ※市国語部員による研究協議

7月 6日	全体	理論研修 市指導室 指導主事 長塚和徳先生のご指導
夏休み	一般研修 (希望者)	希望をもとに3日間の研修 図工(絵手紙・紙工作), 保健体育(ロングプレス)
9月10日	全体→ ブロック	2学期の研修についての確認
10月 2日	全体	授業研究(12月), 計画訪問準備
12月 3日	全体	提案授業(2) (5の3 向井浩恵教諭) ※授業についてのリフレクション(グループ) ※長塚指導主事のご指導
12月21日	ブロック	2学期の研修の成果と課題の整理
1月15日	ブロック	3学期の授業研究に向けた話し合い, 準備
1月21日	全体	提案授業(3) (2の3 石塚真梨子教諭) ※授業についてのリフレクション(全体) ※長塚指導主事のご指導
2月 4日	全体	1年間の研修のまとめ
3月 4日	全体	次年度の研修についての検討

6 月 (福山教諭)



12 月 (向井教諭)



1 月 (石塚教諭)



〈その他〉

- わくわく授業「わくわく ことのは 水曜日」の一層の充実：学習意欲の喚起
- 「こぶし わくわく」掲示板の活用：他学年との交流
- ノート展の工夫：自分の考えをもつ、深める、表現するにつなげるノートの在り方
- 家庭学習の推進：確かな学力の定着

6 成果と課題

(1) 成果

自分の思いを相手に伝える学習を、国語の時間や「わくわく授業」、そして各教科において、実生活とのつながりを意識しながら実践してきた。そのことにより、子どもたちは、進んでことばや文字に表現しようとする態度が身に付き、より明確に自分の伝えたい事柄を話したり、書いたりすることができるようになってきた。また、子どもたちのことばが増えたことにより、容易に自分の考えがもてるようになり、話すことや聞くことへの抵抗感が無くなってきた。このように、表現することへの意識が高まってきたことが、成果のひとつといえる。



「わくわく授業(かるた)1年」

(2) 課題

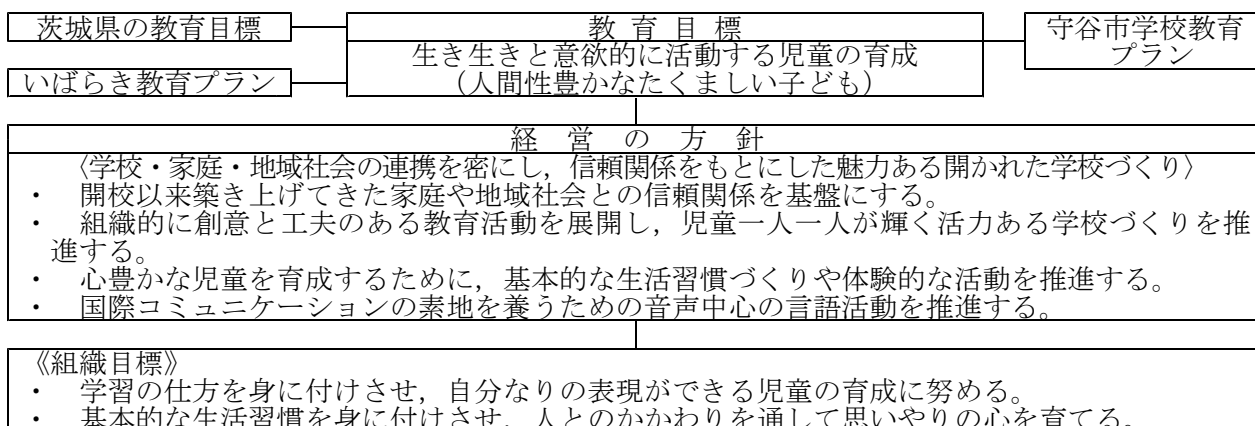
本校では、3年間の研修を通して「伝え合う力」の習得と活用の学習を一体化させ、表現する意欲を高めることができた。しかし、子どもたち同士が伝え合う中で、友だちの思いや考えを聞き、それを自分の考えと比較したり自分の考えに取り入れたりする深まりのある学習にしていくことはまだ十分ではない。今後は、この力を高めるために、国語の時間では子ども自身が考えたり話したりする時間を確保すること、他教科では、国語で培った力を生かす授業を工夫していくことを目標としていきたい。

特色ある学校づくり推進事業

守谷市立大野小学校

1 はじめに

本校では、学校教育目標である「生き生きと意欲的に活動する児童の育成（人間性豊かなたくましい子ども）」の達成のために、前年度の教育活動についての検証を踏まえた組織目標を設定した。
また、今年度は「特色ある学校づくり推進事業」の指定を受け、特色ある学校づくりのために教育活動を展開してきた。



2 実践

(1) 学習の仕方を身に付けさせ、自分なりの表現ができる児童の育成

① 校内研修の推進

今年度は、本校児童の課題である表現力の育成を目指して研究主任を中心に校内研修に取り組んだ。「自分の考えをもち、自分の言葉で表現できる児童の育成 ～算数的活動の充実を通して～」をテーマに、特に自分の考えを自分の言葉で書くこと、分かりやすく表現することに重点を置いて、全ての学年で研究授業を行ったり、指導方法等について検討したりするなど、1年間を通して研修に取り組んだ。

また、書いて表現する力を伸ばしていくために、ノートの使い方も発達段階に応じて継続して指導していただけるように校内で統一した形式を作成した。

さらに、日々の授業の中で表現力、活用力を高めていくためのよりよい学習指導方法について外部講師を招いての研修も実施した。



【6年研究授業（12月4日）】

② 基礎・基本の定着

- ・ 朝のスキルタイムのドリル学習を実施（全学年）

月曜日から水曜日の朝の時間（8:20～8:35）をスキルタイムに設定し、漢字、計算の繰り返し練習に取り組ませた。木曜日の朝の時間にスキルテストを実施し、定着度を確認するとともに、満点が取れるまで何度も問題に挑戦させることで、基礎・基本の確実な定着を目指した。

- ・ 算数科における全学年複数支援体制

学習支援ティーチャー、社会人T T等の配置により、全学級の算数の時間が複数支援体制になるようにした。T Tや少人数指導により算数の学力向上に取り組んだ。

- ・ 「学習の約束」の見直し

学力向上のためには、学習習慣を身に付けさせることが土台となる。今まで使用してきた「学習の約束」について全職員で内容を見直し、共通理解を図ることによって、全学年において同じように指導できるようにした。

③ 音読の励行

はっきりとした声で話すことができるようにするために、朝の会などにおいてスピーチの時間を設定したり、音読に取り組ませたりした。音読に対する意欲を高めるために、全校での音読集会を2回実施した。



【音読集会（7月11日）】

(2) 基本的な生活習慣を身に付けさせ、人とかかわりを通して思いやりの心を育てる

① 米づくり体験学習

本校では、4年生を中心に全学年が関わる1年間を通した米づくり体験学習を行っている。大野小協力の会をはじめとして、保護者、PTA役員、地域の方々、大野地区田園環境保全活動組織(EPOP)等、多くの方の協力により活動を進めている。この活動は、地域の人との交流を深め、大野地区の環境について学習するとともに、人とかかわりを通して思いやりの心を育てることや、食についての関心を高めることなど、幅広いねらいをもったものである。

平成24年度米づくり体験学習計画

守谷市立大野小学校

1 ねらい

大野地区の特色を生かし、地域の人々とともに、稲作りを体験することにより、土に親しみながら稲作りについて学ぶことができる。また、地域の農家の様子について調べ、農業の現状を理解し、食の大切さに気付くことができる。

2 教科 生活科、総合的な学習の時間扱い

3 実施学年 全学年

4 協力していただく方々

大野小協力の会、保護者、PTA役員、地域の方々、EPOP

5 実施計画

期 日	時 間	内 容
5月 8日(火)	10:30～ 11:30	種まきの説明 30分 種まき 30分 【1・2・4年生】
5月21日(月)	13:00～ 15:30	代かき見学、田んぼリレー 【4年生】
5月24日(木)	9:00～ 12:00	田植えの説明、田植え 【4・5年生】
7月 8月	様子を見て	除草 4年児童、保護者、職員
9月	総合的な学習の時間	観察
10月 3日(水)	9:00～ 12:00	稲刈り おだかけ 【4・6年生】
10月18日(木)	9:00～ 11:00	脱穀・粃すり 【3・4年生】
11月 3日(土)	9:00～ 15:00	収穫祭 【全学年】



田んぼリレー



田植え



稲刈り



脱穀



収穫祭

【児童の感想】

- ・ 1年間を通して米づくりを体験して、米づくりはとても大変だと思った。
- ・ 昔の機械を使った作業は大変だった。
- ・ できるだけお米を残さないようにしようと思う。
- ・ 大野地区にある田んぼを大切にしていきたい。

② 地域の教育ボランティアの積極的活用

地域の方々に協力をいただきながら教育活動を充実させ、児童に地域のよさに気付かせることを通して、大野地区に誇りをもち、自らの夢や希望を育んでいきたいと考え、大野地区の方に教育活動に対する協力をよびかけ、以下のような内容で協力をいただいた。

○登下校時の見守り ○読み聞かせ ○タグラグビー ○和楽器体験 ○命の授業 等

3 成果と今後の課題

自分の考えをもち、自分の言葉で表現できる児童の育成については、児童の発表の様子やノートの内容などから、徐々に成果が見られるようになってきている。特に考えを書くことについての成長が見られた。しかし、自分の考えを伝えることについては、まだ十分ではないと思われる。さらに児童の力を伸長させるように来年度も継続して取り組んでいく計画である。

人とかかわりを通して思いやりの心を育てることについては、自ら進んで関わっていきこうとする姿が見られるようになるなど、その効果が表れてきている。多くの方々の協力をいただき、1年間を通して取り組んでいる米づくりは、本校において重要な位置を占める教育活動である。思いやりの心の育成を目指し、地域とのつながりを大切にしながら、今後も続けていきたい取組である。

特色ある学校推進事業

守谷市立高野小学校

1 はじめに

本校では、「未来を生きるたくましい子どもを育てる」を教育目標に掲げ、学力の向上・豊かな心の育成・健康な体の育成に努め、知・徳・体のバランスのとれた児童の育成を目指している。学力の向上では、基礎・基本の徹底、読書活動の推進と並んで外部人材の活用による体験活動の充実に取り組んでいる。

今年度、守谷市より「特色ある学校推進事業」の指定を受け、外部人材のより積極的な活用を図り、授業の活性化に取り組んできた。

2 実践

(1) 米作り学習（5年総合的な学習の時間）

学校近くの田んぼを提供していただき、高野環境保全活動組織の皆さん、地域の農家の皆さんにご指導いただきながら、田植え、稲刈りを体験し、収穫した米を使い収穫を祝う会を開いた。その後、これらの貴重な体験を生かし、米作りに関して各自が課題を設定し、学習に取り組んでいる。

① 苗床見学

田植えに先立ち、自分たちが実際に植える苗を育てている苗床を見学した。苗を育てるための大きなビニールハウスやスプリンクラー、2000枚の苗床など、ほとんどの児童が初めて見るものばかりであった。



泥の感触も楽しい田植え作業

② 田植え

5月10日、高野環境保全活動組織の皆さん、地域の皆さんの指導の下、田植えを体験することができた。初めて田んぼに入る児童が多く、田植え作業に悪戦苦闘しながらも、泥の感触を楽しんでいた。

③ 稲刈り

9月13日、稲刈り実施。高野環境保全活動組織の皆さんの指導で、鎌を使って刈り取る作業、刈り取った稲を交互に重ねて藁でしばる作業、おだかけして干す作業を体験した。そのほか、トラクターによる刈り取り作業の様子を見学。機械化による作業効率の良さについても知ることができた。



収穫の喜びを感じた稲刈り作業

④ 学習発表会と親子おにぎり会食会

赤っ腹まつり午前中の授業参観。これまで学習してきた米作りについての学習発表会を高野環境保全活動組織の皆さんを招いて開いた。また、収穫した米を炊き、親子でおにぎりにして試食した。

⑤ 収穫を祝う会

11月15日、高野環境保全活動組織の皆さんを招いて、収穫を祝う会を開いた。収穫した米を炊いたご飯と子どもたち手作りの味噌汁を用意し、これまで米作りでお世話になった皆さんへ、感謝の気持ちを伝えた。いらした皆さんからは、昔の高野小学校の話や、農家の立場から、今の米作りの現状や問題点などについても聞くことができた。



高野環境保全活動組織の皆さんを招いての収穫を祝う会

(2) 昔あそび学習（1年生活科）

高野地区の敬老会の皆さん（昔遊び名人）にご指導いただき、昔のあそびを知り、一緒に楽しく遊び、さらに他の児童に昔あそびを伝える活動に取り組んだ。

① 昔あそび体験

当日は、15人の昔遊び名人の指導により、8つの遊び（竹馬、羽根つき、あやとり、かるた、こま、ベーゴマ、ビー玉、けん玉）を体験した。昔遊び名人にコツを教えてもらい、これまで自分たちだけでは全くできなかった遊びが、できるようになった児童も多くいた。指導をいただいたお年寄りからも、「自分も久しぶりだったが、楽しかった」「10歳若返った」というような声をいただいた。



昔遊び名人から「コツ」を伝授

② 昔あそびにチャレンジ

お年寄り（昔遊び名人）から教えてもらい、得意になった昔遊びを他のグループの友達に教えて、友達をちびっこ名人にするという学習。昔遊び名人と一緒に遊びながら、昔遊びのコツや技を教えてもらう体験活動で、できなかった技ができるようになった喜びや楽しさを十分に味わうことで、友達にも教えたい、伝えたいという思いを引き出すことができた。名人と遊んだ体験から、身振りを付けながら上手になるコツを生き生きと表現したり、友達を褒めたりする様子が見られた。

(3) キャリア教育「いろいろな職業を知ろう」

(6年総合的な学習の時間)

この学習は、保護者の方のコーディネートにより、今年で4年目を迎えた。今回は、23人の様々な職種の方にゲストティチャー（GT）として来校いただき、その道のプロならではの貴重な話を聞くことができた。



GTの話に真剣に聞き入る子どもたち

① 「いろいろな職業を知ろう」学習会

この学習は、様々な職業についての体験談を聞き、今後の自分の生き方について考える機会となることをねらいとしている。当日は、医師、デザイナー、通訳、獣医師、テーマパーク社員、グリーンコーディネーター、薬剤師、寝具製作技能士、食育コーディネーター、テレビ局社員、デコレーター、パイロット、看護師、和菓子職人、身体障害者相談員、農業経営者、輸入雑貨店員、宇宙開発エンジニア、トップスタイリスト、アパレル会社社長、塾講師、企画コーディネーター、美容師の皆さんをお招きした。子どもたちは、GTの中から3人を選んで20分間ずつじっくりと話を聞いた。「みんなが笑顔になれるよう頑張っています」という話を聞いたり、職種は違っても誰もが高い目標をもって努力していることが分かり、将来の生き方を考え始めた子どもたちにとってたいへん貴重な体験となった。



② 事後の活動

この活動に対する感想をまとめ、働くということについて考える時間を設けた。次に、なりたい職業に就き、社会で活躍している自分を描く「自分の未来を描いてみよう」の活動を行った。さらに、キッザニアにおいて職業体験を行った。

3 考察

本校では、教育目標実現のため、学校スローガンを「笑顔・感動・向上心」に定め、全校で取り組んでいる。子どもたちの体験活動の様子を見てみると、どの活動にも笑顔と感動があふれている。地域の人たちと触れあう喜び、「本物」を目にしたときの感動、自分もできたという喜びと感動は、子どもたちにとってかけがえのない経験であり、さらなる向上心を育んでくれると考える。今後も、地域と連携し、外部人材の活用を積極的に図っていきたいと考える。

4 課題

外部人材の活用を、教科・領域の分野にもさらに広げ、児童が楽しく学べる学校づくりを進め、学校全体の活性化を図っていききたい。

地域で支える学校づくり推進事業

守谷市立守谷小学校

1 はじめに

古い歴史があり、数多くの卒業生を送り出してきた本校は、常に地域の一つのシンボルとして、地域との連携を図りながら教育活動を推進してきた。今年度、校舎改築工事が完了し、新しい校舎へと移行することを機会として、新たな地域の象徴となるよう地域に広く協力を呼びかけていきたい。新校舎には、地域の人々が利用できるコミュニティスペースが新たに設けられる。地域の人々が学校に来やすい状況を作り、開かれた学校づくりを一層推進したい。

また、児童にとっての環境の変化に対応する健康安全面での協力や学習活動のサポートとして、登下校時の交通安全や不審者対策、災害時の安全対策、児童の学習環境づくり、地域の田んぼを借りての農業体験活動等において、地域人材や学校支援ボランティアの活用を図っていききたい。

2 実践

(1) テーマ

地域人材やボランティア活用により、児童の安全と教育活動の充実を図る。

(2) 実践例

ア 地域の協力者による農業体験活動の実施（５年生）

本校では、総合的な学習の時間を使って、５年生が農業体験学習として「米作り」をテーマに取り組んでいる。これまでは、学区内の田を借用し、現地において米作りを実施していたが、



バケツ稲による苗植えの実施 ５月



脱穀体験 １０月

今年度は、活動場所の放射線量等に配慮し、バケツ稲での実施となった。そのため、ボランティアの方々に、バケツに入れる安全な土や稲作りに必要な道具等を学校まで運搬してもらい、学校の敷地内で活動を行った。

できれば現地において自然と触れ合いながら実施したい内容であったが、ボランティアの方々の丁寧な説明と指導のおかげで、安全にしかも貴重な体験をすることができた。

イ 学校行事でのゲストティーチャーの活用

小さな鳥の資料館館長である池田昇先生をはじめ３名のゲストティーチャーに「もりっこ学習発表会」に参加していただいた。フクロウとの触れ合い体験、ノスリやハヤブサのフライトショー等、普段では見ることのできない鳥の様子に児童の関心が高まった。また、地域の古文書クラブの皆さん方には、古文書研究の楽しさを映像を使って紹介するコーナーを設けていただき、多くの児童や保護者が参加した。



エデュケーションボードとの
ふれ合い １１月

ウ 登下校時の交通安全、不審者対策での見守り隊

年度初めより、児童の交通安全等でご協力いただいているボランティアの皆さんとPTA本部、PTA安全委員会の代表の方々と協議を重ね、保護者と地域の皆さんで作る見守り組織を結成した。できるだけ多くの方に参加していただき、子どもたちを地域で見守る意識を、地域ぐるみで共有していくことを目指している。名称は、守小MVP（M見守り、



なわとび集会参観



第1回 MVP集会

Vボランティア、Pプロジェクト)

とし、学区内の大人であれば、誰でも気軽に参加できるボランティアとして参加を呼びかけている。児童がボランティアの方と顔見知りになるため、MVPバッジを作成し、あいさつ運動もお願いしている。現在は、市の社会福祉協議会や学区内の区長の皆さんにも活動をサポートしていただいております、今後さらに活動範囲を広げていく予定である。

エ 保護者ボランティア等を活用しての新校舎への引っ越し

8月4日～6日の3日間、旧校舎から新校舎への引っ越し作業を行った。市役所の方、中央図書館の方にもご協力頂き、守谷小出身の守谷中、愛宕中の生徒、保護者を招集して作業を行った。新校舎は木造建築ということで、廊下等で台車が使用できない場所が多く、重い物でもほとんどの経路を人の手で運ぶしかなかったが、たくさんの方の協力で、無事引っ越し作業を終了することができた。学校としては、このような機会を生かし、地域との連携力を強め、学校全体の教育力向上を図ることができたと思う。

3 成果

新校舎改築工事に伴う様々な課題がある中、地域や保護者のボランティアによるサポートは、学校にとって、非常に心強いものであった。特に児童にとって新校舎への引っ越しは、影響が大きい。そのため、引っ越しの計画を綿密に行い、全職員による共通理解を十分に図ったことが組織の協働体制を強めたようである。そして、地域社会や保護者への情報提供を積極的に行い、学校への理解を深めてもらうことが、円滑な運営につながった。

さらに、引っ越しの後には、児童が新校舎の新しい生活環境に慣れ、通常の学校生活のリズムをできるだけ早い機会に取り戻すことが大きな課題であった。そこで、まず第1に児童の安全な生活を保障することが大切と考え、地域の交通安全や不審者対策で見守りを実施する安全ボランティア活動をスタートすることになった。現在登録数88名の「守小MVP」であるが、各方面に本校の取り組みについて紹介する機会を得ることができ、社会福祉協議会や学区の区長会、取手警察からも連携の要請があり、活動の可能性が広がってきている。

4 今後の課題

学習活動や学校行事において、地域人材や保護者に児童の体験活動等を支援していただくためには、今後も学校の取り組みを積極的に発信し、学校において活用できる地域資源の開発に取り組む必要がある。また、学校の教育力向上の為には、地域社会や保護者との連携をさらに強めていく必要があり、全職員で取り組んでいくことが特に重要である。そのため、教育課程の見直しを十分に行い、これらを踏まえて指導計画の改善に取り組んでいくことが必要である。

また、地域社会との信頼関係をせっかく築いてきた職員の異動等により、それまで積み上げてきた関係が継続できないことも考えられる。守小MVPの取り組みでは、今後学校主導から地域主導へと移行することを想定した組織づくりに心がけていきたい。

論理的な思考力を育成する算数科学習指導のあり方

～算数的活動の充実を通して～

守谷市立黒内小学校

1 はじめに

本校の教育目標は「豊かな心を持ち、自ら行動できる子の育成」であり、求める児童像として、「よく考える子・仲良くする子・力いっぱいがんばる子」を掲げ、自ら考え自ら行動できる生きる力を備えた児童の育成に取り組んでいる。本年度は市教育委員会の研究委嘱2年目を迎え、算数科を中心に校内研修を進めてきた。

2 研究のねらい

算数科の学習において、算数的活動を効果的に取り入れることにより、論理的な思考力を高めるための学習指導のあり方を究明する。

3 研究の仮説

- (1) 児童が目的意識を持って主体的に取り組む算数的活動を意識的に仕組むことで、児童の論理的な思考の育成を図れるだろう。
- (2) 授業の組み立ての中で、自力解決・比較検討等の問題解決的な場面を保証することにより、学習スキルが向上し、根拠をもった活発な話し合いが進むであろう。
- (3) 学習環境を整えることにより、算数で学んだことを日常生活と結びつけて考えたり、新しい学習の中で根拠として使ったりしていくことができるであろう。

4 研究の内容

(1) 基本的な考え方

ア 「論理的な思考力」について

「論理的思考力」の育成が大切であることは、文部科学省をはじめ、様々な教育機関が明言するとともに、研究がなされている。ただ、この概念の定義付けは様々であり、本研究においては「帰納的・演繹的・類推的に筋道立てて考えをつくり上げていくこと」と考え進めていく。

イ 「論理的な思考力を育成する」学習指導について

「筋道立てて考える」ことは、小学校学習指導要領解説算数編では「根拠を明らかにし、筋道立てて体系的に考えること」と記述しており、これを進めていくことで数学的な思考力・表現力の育成がなされていくとされている。そして、数学的な価値のある思考力・判断力・表現力を育てるには、論証活動の充実から、問題解決型の授業を展開するとともに、その一場面である学習活動「比較検討」を充実することで育てられるといわれている。

ウ 「算数的活動」について

小学校学習指導要領解説算数編において、算数科、数学科の改善の基本方針として、「発達段階に応じ、算数的活動・数学的活動の一層の充実」が挙げられ、これを通して、基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付けることや数学的な思考力・表現力の育成、学ぶ意欲の向上が求められている。また、算数的活動はこれらの育成や向上を求めるのに重要な役割を果たすと記されている。

本校では、これらの考えをもとに児童の実態を踏まえ、「論理的思考力」を「根拠を明らかにしてわかりやすく筋道立てて考えること」と捉え、この育成を進めていくことが「数学的な思考力・判断力・表現力の育成」につながると考えた。

そこで、授業方法として問題解決型の学習を仕組み、特に比較検討場面の指導の在り方に研究の重点を置くとともに、意識的に「算数的活動」を取り込み、その充実を図り、算数科における諸能力の育成と向上を目指していく。また、数量や図形について実感的な理解を促すとともに、得られた知識を生活や他の学習に活用していくことで、算数を学ぶ意義や有用感を実感させていきたいと考えた。

(2) 学習過程の工夫

問題解決型授業の構成として、「問題把握」「自力解決」「比較検討」「まとめ」の4つの段階を設定する。

ア 問題把握…子どもの中に問題が生起し、それを解決する活動の見通しを立てる。

イ 自力解決…児童一人一人に時間を保証し、見通しに沿った活動をするとともに、必要に応じて小集団で話し合ったり確かめたりする。

ウ 比較検討…児童一人一人の考えを説明し伝えあう活動から、問題解決を収束して一般化する。

エ まとめ …「課題」をもとに、何を考えてきたかを明らかにする。本時の振り返りをする。

5 研究の組織・経過

(1) 学習指導研究部

論理的な思考を育成するために、表現力としての基礎的・基本的な能力（書くスキル・話すスキル・聞くスキル）が身につくように授業を積み重ねた。

ア ノート記述の向上

より良いノート作りに取り組ませることは、児童の知識の定着を図り、思考を広げたり深めたりすることに有効であることが、指導していく中で確認できた。

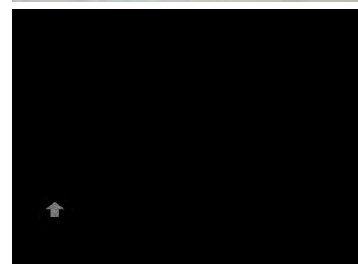
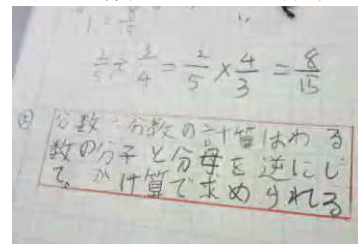
- ・ 学年の発達段階に応じたノート指導のきまりの作成
- ・ 学習過程に沿ったまとめ方の習熟、文章表現の指導
- ・ 文章表現をしやすく配慮・工夫
- ・ 「ノート展コーナー」の設置

イ 話し方・聞き方の向上

「学習スキル目標」として「めざす児童の学びの姿」を設定して、話し方と聞き方のスキルアップを段階ごとに設定し、能力の向上を目指した。

ウ 個に応じた補充的な学習指導

- ・ TTによる指導《3, 4, 5, 6年生で実施》
- ・ 少人数指導《2学級を3つの少人数グループに分けて実施》
- ・ ぐんぐんタイム（算数科におけるさかのぼり指導）《3年生以上で実施》
- ・ 漢字・計算博士テスト《全学年で実施》



(2) 校内環境研究部

学習環境を整えることにより、学んだことを日常生活と結びつけて考えたり、学習の中で根拠として使ったりしていくことができる児童の育成を目指し、算数的環境の整備に努めた。

ア 階段や踊り場を活用した

算数コーナーの設置



イ 常時ノート展の開催



ウ 教室壁面に算数コーナーの設置



学級の算数コーナーに児童自身の学びの跡を累積していったことにより、児童が見て、既習内容を思い出したり、それらを活用して今の学習のヒントを得たりする等、算数学習の連続性や関連性を意識し既習事項を生かした思考に繋げることができた。また、階段掲示した公式等の算数的環境は視覚として記憶に残る効果も期待できた。

6 研究のまとめ

(1) 研究の成果

ア 問題解決型授業の各段階において、算数的活動を意識的に授業に仕組むことで、課題を明確に捉えられたり、主体的に学習を進められたりする児童の姿が見られるようになってきた。

その結果、数学的な考え方に関する力の向上が見られたとともに、自分の考えを筋道立てて、論理的に思考する力が向上してきている。

イ 児童が自分で考えたことを発達段階に応じて話したり、聞いたり、質問したりする機会が増え、そのための学習スキルが徐々に身についてきている。また、教師もその授業スタイルの研修が深まり、自信を持って授業を作ることができるようになってきている。

ウ 学習環境を整えることにより、既習内容を新しい知識の獲得に活用したり、生活に活用したりできるようになり、その有用感を感じる児童が増えてきている。

(2) 今後の課題

ア 問題解決型の学習がより効果を発揮できるよう、各段階での教師の役割や望ましい児童の学習活動の姿をより具体的に見いだしていく必要がある。

イ 学力の二極化の解消のための授業展開や指導法の工夫・改善を進める。

思考力・判断力・表現力をはぐくむ国語科学習指導 ー「読むこと」における単元を貫く言語活動の充実を通してー

守谷市立御所ヶ丘小学校

1 はじめに

本校では、今年度の組織目標「学習指導の改善サイクルPDCAを確立し、学力の向上を図る。」の具現化に向け、知育・徳育・体育部会ごとにグループ目標及び具体的施策を設定し、全職員で取り組んでいる。特に、本年度は市教育委員会の指定校1年次の指定を受け、研究テーマ「思考力・判断力・表現力をはぐくむ国語科学習指導」のもとに校内研修を進めた。2年次の発表に向け国語科の基礎作りを行ってきた。

2 研究テーマについて

(1) 思考力・判断力・表現力をはぐくむことについて

次の世代を担う子供たちには、幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて判断したり、他者と切磋琢磨して共存を図ったりして、変化に対応する能力や資質が益々必要となっている。しかしながら、学力に関する各種の調査の結果では、依然として我が国の子供たちの思考力・判断力・表現力等に課題があることが明らかになっている。また、本校の児童については、平成23年度学力診断のためのテストにおいて、対象となる全学年の全教科で県平均を上回っているものの、各教科の「思考・判断・表現」の領域に課題がある。

そこで、全ての教科の学習の基本ともなる国語科学習指導を重視し、学力の向上を図るために、思考力・判断力・表現力をはぐくむことが喫緊の課題であると考えた。

(2) 「読むこと」における単元を貫く言語活動の充実について

思考力・判断力・表現力の力をはぐくむためには、実生活で生きてはたらく、国語の能力を身に付けることを一層重視して国語科の授業改善を図ることが求められている。(中央教育審議会答申平成20年1月の国語科の「改善の基本方針」より)

そのためには、学習指導要領の内容の(2)に示す「言語活動例」を基に、具体的な言語活動を発達の段階に応じて行うことが重要である。

さらに、「音読する」「話し合う」といった言語活動が、ばらばらではなく、単元を貫いて位置付けられることが必要であり、その具体化が課題であると考えた。言語活動の充実に関する指導事例集「平成22年12月 文部科学省、「初等教育資料」通巻874号より」

本校児童においては、前述のとおり学力は高いものの、国語科では3領域の中で、いずれの学年でも「読むこと」が、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の2領域よりも低いことが課題である。

そこで、研究テーマが目指す力をはぐくむために、「読むこと」の領域において、授業改善を図り、単元を貫く言語活動の充実を図ることを手立てとする。

3 研究の仮説

国語科学習指導の指導事項「読むこと」において単元を貫く具体的な言語活動を発達の段階に応じて行うことで、実生活で生きてはたらく思考力・判断力・表現力をはぐくむことができるであろう。

4 研究の内容

(1) 各研究部の取り組み

① 知育部会

- ・御所小スタイルの国語科指導案の形式の作成
- ・学習の手引きの作成→全児童に配付
- ・全職員による事前の学習指導案検討を含む授業研究の実施。
(研修センター校内授業研究支援2回・市指定要請訪問1回・校内研修2回 計5回)

② 徳育部会

- ・国語環境づくり
- ・掲示板に国語の環境を作成(学年ごとに)
- ・本の紹介コーナーの設置
- ・学年に応じたマナーアップカードの作成・実施

③ 体育部会

- ・「読むこと」における本校独自の意識調査・実態調査の作成・実施・集計・分析
学年ごとに「読むこと」のテストを作成し全校で実施・分析・改善策の提示。
(第6学年の例：次の新聞記事「おもしろサイエンス」を読んであとの問いに答えましょう)

(2) 研究の推進

全職員を三つのプロジェクト部会(知・徳・体)にわけ、研修を行ってきた。定期的に部長会を開くことで、各部会の活動を報告し合い、研究推進の方向性や今後の課題の確認を行った。また、提案授業の指導案検討を全職員で行った。

指導案作成(指導者)→指導案検討(全職員)→ブロック検討会(低中高学年)→研究推進委員会→指導案完成

5 授業改善のための校内授業研究

(1) 研究授業

現行の学習指導案の形式で実施

- ① ア 6月 第3学年1組
「段落に気を付けて読もう」
現行の学習指導案の形式で実施



- イ 7月 第1学年1組
「おおきなかぶ」



- ② 「読むこと」における単元を貫く言語活動を視覚化することを目指す御所スタイルの国語科学習指導案の形式づくりの開始

- ア 10月 第2学年1組
「どうぶつのひみつをみんなでさぐろう」

- 単元の目標
教材文や参考図書、ホームページに書かれている事柄の順序を考えながら内容の大体を読み取り、ビバーや他の動物に関するクイズを作ることができる。
- 本時の目標
集めた情報をもとにクイズの問題と答えを考えて分かりやすく書くことができる。
- 単元を貫く言語活動



<動物についてのクイズ作り>

- イ 11月 第6学年2組
「未来に生かす自然のエネルギー」

- 単元の目標
資料や具体例の示し方に注意しながら、文章全体の構成を把握し、自分の考えを明確にすることができる。
- 本時の目標
フリップを活用した交流発表を通して、自然エネルギーについて自分の考えを深めることができる。
- 単元を貫く言語活動
課題解決のためのエネルギー問題についてのフリップ作成及び交流



<本時が目指す姿を視覚化する>

- ウ 1月 第4学年1組

「おすすめの本を紹介する読書新聞を作って紹介しよう」

- 単元の目標
読んだ物語と関連するテーマのいろいろな本を読み取り、心に残ったところや、内容を要約して本を読むことができる。
- 本時の目標
すすめたい本のあらすじを書き、文章の内容を要約することができる。
- 単元を貫く言語活動
読書新聞を作って紹介する。



<読書新聞づくり>

6 研修の成果と課題

(1) 成果

- 全職員でPDCAのサイクルで授業研修を行ったことが共通理解につながったと考えられる。
- 2回の教育研修センターの校内研修支援と1回の市指定校訪問を行った。学習指導案の形式や単元を貫く言語活動について指導を受け御所ヶ丘スタイルができつつある。

(2) 課題

- 御所ヶ丘スタイルの学習指導案の更なる検討（学習計画のスリム化・本時の内容）
- 仮説の吟味と目指す児童の姿の明確化
- 「読むこと」の指導事項におけるオリジナルな国語科年間計画指導計画の作成

言語活動を充実し、豊かな表現力を育てる指導の工夫

守谷市立郷州小学校

1 はじめに

本校では、「夢と生きる力をもつ、心豊かな児童の育成」という教育目標の具現化に向け、「学力の向上」「好ましい人間関係づくり」「体力の向上、計画的・継続的な健康教育の推進」を努力目標として、日々の教育活動を行っている。本年度は、市教育委員会の指定を受け、「言語活動を充実し、豊かな表現力を育てる指導の工夫～書くこと、伝え合うことを中核として」を研究主題に設定し、国語科を中心とした各教科・領域における指導、児童を取り巻く環境の整備を行ってきた。

2 研究のねらい

- 様々な場面で、言語活動を充実させ、言語活動により、基礎的基本的な知識及び技能の習得、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力を育む。
- 国語科を中心とした各教科・領域において、表現力を育てるための様々な指導法を工夫して、確かな学力を身につけさせる。
 - ・書くこと、伝え合うことを中心とした表現力を育てる学習指導についての研究
 - ・学校生活全般における言語活動の充実による表現力育成の工夫

3 本年度の実践

(1) 豊かな表現力を育てるための実践

○各教科における言語活動の洗い出し

各教科の年間指導（活動）計画を点検し、どのような言語活動が行えるのか、どのような手段で表現力を育成するのかを確認し、年間指導（活動）計画に明記した。

○効果的に言語に触れる環境の整備

教室や廊下、階段の踊り場などに「言葉の広場」「季節の童謡」などを掲示し、言語に触れる環境を作ることにより、児童の言語活動への興味を喚起したり、語彙の充実につながったりするようにした。

また、低学年は「今月の音読」で古文や言葉遊びに触れさせ、高学年は「今月の短歌」で毎月2首の短歌を覚えるようにした。



○言語活動の充実につなげるためのコミュニケーショントレーニングタイムの設置

①朝自習の時間を活用したショートトレーニング（GOGOタイム）

2週間に1回、朝自習の10分間で学年の発達段階に応じた言語活動に関するワークシートに取り組むことで、継続的に言葉に対する感覚を育んだ。

②学級活動や道徳の時間を活用したコミュニケーショントレーニング

児童相互の人間関係の充実がコミュニケーションの活性化につながると考え、学級活動や道徳の時間を活用して、グループ・エン・カウンターやソーシャルスキルトレーニングを行うよう心がけた。

○話し合いの手引きの作成（学級会活動・ペア・グループ学習）

学級活動での話し合いや各教科・領域におけるペア・グループ学習の充実を図るために、話し合いの手引きを作成した。ペア・グループ学習のための手引きは、全児童の机の中に常備し、必要なときに活用できるようにした。また、学級会活動のための手引きは各学級に常備し、司会等が活用できるようにした。

○外部講師を招いての研修

職員のみでの研修では不十分になりがちな理論面の強化のため、外部講師を招いて授業研究及び理論研修を行った。（８月・９月に実施）

(2) 各学年及び各教科領域における言語活動を重視した授業実践

本年度は、各担任が、各教科領域において言語活動を重視し、授業展開の中に意図的に言語活動を取り入れるように心がけた。また、各担任が１回ずつ指導案を書き、提案授業を行うことにより、指導法の工夫や、指導力の向上を図った。

【各学年・各教科・領域における実践例】

学年	教科・領域	単元・題材名	主 な 言 語 活 動
1 年	特活(学活)	「仲良しパワーアップ大作戦」の遊びを決めよう 映して遊ぼう	話し合いカードに自分の意見を事前を書いておき、自信をもって意見発表できるようにする。話し合い後の感想を書いて発表する。 友達の作品を鑑賞し、インタビューしたり答えたりする。
2 年	国 語 算 数 生 活	詩を読もう かけ算 発見自分のよいところ	様々な雨の音を想像して擬音語を使った一行詩を作り、自分たちの作った詩を音読する。 自分の考えたかけ算の求め方を友達に分かりやすく説明する。 友達のよいところを伝え合う。友達から自分のよさを伝えられた感想を発表する。
3 年	国 語 理 科	心に残ったことを書こう 風やゴムの働きを調べよう	メモカードを取捨選択し、伝えたいことの中心を明確にして、組み立て表を作る。 ゴムカーゲーム大会に向け、自分で考えた作戦を友達に分かりやすく説明する。
4 年	社 会 音 楽	ごみと住みよいくらし 旋律の特徴を感じ取ろう	ごみに関する自分の考えたキーワードをもとに、友達に自分の考えを説明する。 曲の印象を表わした体の動きを言葉で表現したり、２曲の音楽的要素を比較しながら発表する。
5 年	総合的な学習の時間	思いやりの輪を広げよう	幼稚園児の特徴を捉え、園児に伝わるように話したり、接したりする。
6 年	体育(保健) 外国語活動	病気の予防 1年生に英語を教えよう	病気の原因について、意見を付箋紙に書き出す。自分たちが知っている言葉を使って、病気のキーワードを探す。 学級内でのリハーサルを通して、友達とコミュニケーションを図り、互いにアドバイスし合う。
情緒	算 数	二等辺三角形と正三角形	分類した理由をそれぞれの三角形の定義に基づいて説明する。
知的	生活単元	感謝の気持ちをあらわそう	自分の選んだ写真を使って、学級での思い出を相手に分かるように発表し合う。

上記の表は、提案授業の一覧である。指導案の中には「研究主題とのかかわり」「主な言語活動」を明記し、授業の中でどんな力を育みたいか、そのためにどのような支援を行うかを明らかにした。授業後の協議会でも、改善点を次に生かすような話し合いがもたれ、日々の授業改善に繋がった。



4 成果と今後の課題

(1) 成果

- ・様々な取り組みを行った結果、問題意識や相手意識をもって書いたり、発表したりしようとする態度が育ってきた。
- ・「友達との学びあい・教えあい」の時間の確保だけでなく、自力解決の時間を意図的に設けたことで、「思考力・判断力・表現力」育成に繋がった。

(2) 課題

- ・児童が主体的に言語活動に取り組むような「課題設定」を考えていく必要がある。
- ・「言語活動の充実の日常化」を計る上で必要な手だてや授業の要素をさらに明確にし、指導にあたっていきたい。
- ・「学習評価」の進め方（規準、時期、方法、支援の手だて）をより明確にする。

特色ある学校づくりの推進事業

守谷市立松前台小学校

1 はじめに

本校では、「一人一人の子どもが楽しいと思える学級・学年・学校をつくろう」という重点のもとに、児童一人一人の可能性を見いだし、伸ばすことを重視し、「確かな学力」「豊かな人間性」「健康や体力」を育成すること、つまり、社会のどのような変化にも対応できる「生きる力」を育てる学校を目指している。その一つとして、「自立と社会参加をめざす特別支援教育」を推進している。

本校の特別支援教育では、全職員が支援者となって取り組んでいる。基本にあるのは、「障害のあるなしにかかわらず、支援の必要な子どもに必要な支援をしていこう」「障害がある子もない子も、共に育ち共に生きる」というインクルーシブ教育の考え方である。そのために、校内支援体制の改善と充実、特別支援学級経営の充実と弾力的運用などを実践してきた。

2 実践

(1) 校内支援体制の改善と充実

校内支援体制の充実を図り、児童の特性・実態に応じた指導を推進している。特別な配慮を必要とする児童を支援するために、学校全体で支援できるように校内委員会として「配慮を要する児童に対する支援委員会」を組織している。

中心になるのは、特別支援教育コーディネーターを中心とした支援推進委員会である。そして、全職員が支援会議（年4回）、事例検討会（年2回）に参加している。その他ケース会議（関係職員のみ随時）を開いている。

ア 事例1

第2回支援会議では、特別な配慮を必要とする児童について、該当児童担任が、1学期の支援状況や児童の様子をブロックごとに報告し話し合った。それによって、学年を超えた共通理解を図ると共に2学期からより適切な支援や積極的なかわりができるようにした。また、学級別チェックリストを記入して話し合うことにより、全体的な児童の実態を共通理解しながら、本校の課題について考えた。第3回支援会議では、個人別チェックリストを作成し、学級担任の実践を通して個の変容を明らかにし、有効な支援方法について話し合った。

イ 事例2

テーマ「子どもたちにとって、課題だと思うものは何でしょう」で事例検討会を行った。児童の学校での生活の状態や人間関係、身に付いている力や不足している力など、実態を把握し、重点的に取り組むべき課題について KJ 法を活用して研修を行った。さらに出された課題を確認し合い、実際に取り組んでいる対応や実践をマトリックス KJ 法を使って整理、評価し、必要とされる教師の心構えや働きかけなどについて茨城大学教育学部教授 生越 達先生から専門的アドバイスを受ける研修を重ねてきた。

ウ 事例3

その他の研修例として、

- ・教育情報ネットワークの研修講義コンテンツの活用
- ・通常の学級でみられる問題行動への対応と支援について「応用行動分析(ABC 分析)」から学ぶ。・・・茨城県研修センター校内研修支援の活用
- ・ユニバーサルデザインの学級経営と授業づくりから、通常学級における特別支援を知る。

- ・ニーズチェック座席表
 - ・構成的グループエンカウンター
 - ・ロールプレイング（好ましい人間関係づくり）
- 等を実践している。

（２）特別支援学級経営の充実と特別支援学級の弾力的運用

ア 事例１

教育課程と介助補助員の配置の工夫により、多様な交流及び共同学習を展開したり、個の実態に応じて必要なＴＴ支援を実践したりしている。

イ 事例２

本校では、３年生以上が算数の習熟度別学習を行っている。通常は、マスター、チャレンジ、アドベンチャーコースに分かれる。昨年度から自閉症・情緒障害特別支援学級をチャレンジ２コースとして少人数指導を開始した。在籍児童を含めて４名から１０名以下の人数で学習をしている。單元ごとのメンバーは入れ替わるが、必ず特別支援学級の児童と一緒に学ぶようにしている。通常学級の児童と特別支援学級の児童がクラスを超えて共に学び合えることが特徴である。ここでは、特別支援学級担任が特別支援の専門性を生かしながら、相互理解に向けて、障害のある児童のよさを理解し、お互いに認めながら授業を展開している。

３ 考察

全職員が支援者という考えに立って教育活動を推進してきたことが、これまでの様々な成果をあげていると言える。一人一人の困難としていることを継続的に捉えて具体的な支援方法を共通理解したり、学年の課題傾向と実態の変化・問題点をつかみ、日常的教育活動を振り返って支援・指導に生かしたりすることができた。また、情報の共有と積極的な話し合いにより、通常学級の教育に役立つ集団アプローチや個別のアプローチ等を職員が主体的に学ぶ場となった。

特別支援学級経営の充実では、ＴＴ支援によって、特別支援学級在籍児童が交流学級の多くの児童とかかわり合いながら、信頼関係を築き、どの児童も集団の中で認められ、存在感・仲間意識が育まれてきている。弾力的運用として少人数指導を行い、障害のある児童は伸び伸びと自分を出しながら授業に望むことができ、積極的に発表できる場面も見られるようになった。通常学級の児童たちも同様に、少人数の中で学習することにより、学習の定着度が上がると共に楽しく進んで学習する姿がみられた。さらに、障害のある児童のがんばりを理解すると共に、関わり方を理解してきている。

４ 課題

本校の現状からすると、医療・福祉・教育委員会等との連携がさらに大切になると考えられる。現在本校では、医療関係、精神保健福祉士との連携を深めている。医療支援ファイルや訪問指導等を実践しながら、一人一人が抱えている困難の改善を図っていききたい。また、児童の困難さが大きくなるほど、保護者との連携と保護者支援は重要な課題である。

通常学級には、発達障害等を抱えている児童が増えてきている。ますます通常学級における特別支援教育が重要となる。特別支援学級担任が専門性を生かした校内支援の役割を深めると共に通常学級担任が研修の受講等ができる機会がより多く必要である。また、校内で専門的な講師の講義を聴く機会を計画的に確保していく必要性を感じる。

特色ある学校づくり推進事業

守谷市立松ヶ丘小学校

1 はじめに

本校では、「豊かな心を持ち 健康で 自ら課題を見つけて学習し たくましく生きる児童を育てる。」の学校教育目標の達成のために、「確かな学力を身につけさせる教育」・「豊かな心を育む教育」・「健康や体力を育む教育」・「社会の変化に適応に対応できる教育」・「自立と社会参加を目指す特別支援教育」を教育推進の重点事項とし、特色ある学校づくりのために教育活動を展開してきた。

学校教育目標

豊かな心を持ち 健康で 自ら課題を見つけ学習し、たくましく生きる児童を育てる

すすんで

学習する子

- ・目標をもって学習に取り組む、最後までやりぬく子

やさしく思いやり

のある子

- ・互いに認め励まし合える子

明るく

たくましい子

- ・運動に親しみ元気でねばり強い子

2 実践

(1) 算数科における授業研究

ア 研究テーマを「自ら考えをもち進んで伝え合う児童の育成」とし自分の考えを表現できる児童を目指し、一人1回の研究授業を行い授業力向上に努めてきた。

【「伝え合う」ために必要な能力の系統】

	話 す	書 く	話し合い
低学年	○相手を見て、相手に聞こえるようにはっきり話す。 ○理由をつけて話す。 ○順序よく話す。 ・順序を表す言葉を使う。	○話し手の方を見て、最後まで聞く。 ○大事なことを落とさずに聞く。	○話題に沿って話し合う。
中学年	○相手にわかるように話す。 ・結論と理由を話す。 ・図、表や具体物を示しながら話す。 ・相手を見て、反応を確かめながら話す。	○自分の考えと比べながら聞く。 ・反応しながら聞く。(うなずく)	○互いの考えの共通点・相違点を考えながら話し合う。 ・聞いたことに対して感想を言う。 ・わからない所は質問する。
高学年	○自分の考えの根拠を明確にして話す。 ・資料を活用したり、例を示しながら話す。 ○相手に意図が伝わるように話す。 ・相手の考えを引用したり、まとめたりして話す。	○話し手の意図をつかみながら聞く。 ・大事なところをメモしたり、ノートに書いた自分の考えを修正したりしながら聞く。	○話し合いの目的を明確にし、数学的価値を意識しながら話し合う。 ○考えの根拠となる事実をもとに、数学的用語を用いて話し合う。



5年2組(算数授業)



4年1組(道徳授業)



3年3組(音楽授業)

(2) 健康や体力をはぐくむ教育の推進

体育の授業を充実させ体力向上を進めるために準備運動の中に主運動に関係する補助的な運動を継続的に取り入れることで体力向上につなげた。また、業間休みを体力向上づくりの時間として年間を通して実践してきた。月曜日、火曜日、金曜日に持久走や縄跳びを実施して体力向上を進めた。さらに、高学年を中心に始業前に持久走を行い運動に親しむとともに体力向上につなげた。



業間の体力向上(持久走)



業間の体力向上(長なわとび)

(3) のびのび下校の実施(児童と向き合う時間の確保)

水曜日、木曜日、金曜日をのびのび下校として、学年での集団下校ではなく、自由に近くの友達と下校できるようにし、児童と向き合う時間を確保した。

ア 補充的な学習の実施

学年や学級で放課後を利用して補充的な学習を進めた。特に算数の計算や宿題等でつまづいているところの学習を行った。

イ 教育相談の実施

いじめに関するアンケートを実施後、じっくりと児童と話をする機会がないため、放課後の時間を有効につかい児童理解につなげた。

ウ パトロールの強化

今年度はやさしく見守り隊を結成し登下校の安全を地域の方々に協力していただいている。職員による放課後の青パトでの巡視を行い安全確保に心がけている。

(4) 食の教育の充実

ア 各教科、総合的な学習の時間等年間指導計画への位置づけ

イ 給食週間による残さい調べを行い栄養指導につなげた。また、給食月間では、保護者との連携を図り朝食や食事のマナーについてコメントをいただき食について考える時間を作った



のびのび下校(個別学習)



食について考えるカード

3 成果と今後の課題

(1) 成果

- ・学力診断のためのテストによる検証では、授業研究の充実がはかれ、授業の改善に取り組んだ成果でどの教科もプラスの結果が出でている。これは、学校改善プランに沿っての取り組みとのびのび下校での指導も大きな成果の表れだと考えられる。
- ・体力向上についても体力テストの結果からも大きな成果が現れている。

(2) 課題

- ・授業研究をさらに進め、授業力アップを図っていききたい。また、のびのび下校の計画を見直し、学年や学級で計画的に指導が進められるように工夫改善を図っていききたい。
- ・体力向上は、体育指導の充実を図っていききたい。

生徒の実態の分析結果をふまえた学力向上の実践

守谷市立守谷中学校

1 はじめに

新しい学習指導要領は、子どもたちに知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」を育むことを目指すものであり、「確かな学力」として、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決させるために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うことを重視するものである。

本校では新しい学習指導要領の趣旨を十分に踏まえた教育活動推進に当たっての基本コンセプトとして、校長より「我々職員の意識を変える」という視点が示された。日々の活動を「凡事徹底」の精神で、しっかりと向かい合う姿勢をもつ。

本校の組織目標の大きな柱として学力の向上がある。そこで「分かる授業づくり」への取り組みがポイントになる。取り組みとして職員の授業規律を見直し、組織目標が具現化されているか授業の在り方を見直すこと。校内研修体制を見直し、研修の在り方や授業を大切にできる家庭学習の在り方を追求することを実践した。また、会議システムなど業務の効率化を推進する事で、生徒と関わる時間を確保し、生徒の実態を捉えて個に応じた指導体制を確保するなどの取り組みを推進してきた。

全職員が、固定したものの見方ではなく意識を変えて生徒理解に努め、生徒の学力の実態を把握し、より具体的に目標の具現化に努めることで、よりよい人間関係づくりをすすめて、確かな学力を育む取り組みを推進していきたいと考えた。

2 実践

(1) 生徒課題の共有化

ア 学力向上委員の組織と運営

校務分掌に学力向上対策委員会を位置づけ、学力向上のためのあらゆる具体的施策について協議し、学年・学校全体を中心となって推進した。校内研修部が学力向上に関する月の重点目標を設定し、各学年の学力向上委員がその具体的施策を提示し実践につなげている。目標達成度については、毎月学力向上委員が検証し翌月の目標に生きている。

イ 学力・生活状況調査及び守谷中学学力分析シートの作成

生徒の状況を学習面、生活面から把握し指導に生かすための学習・生活状況調査を実施している。ここでのデータを分析し生徒の学習・生活指導に活用している。さらに各教科の多面的な分析を「守谷中学学力分析シート」にまとめ、学力向上に関する情報を共有した。

ウ 全国学力学習状況調査及び学力診断のためのテスト分析

学校改善プランに示された本校の課題を受け、全国学力学習状況調査や学力診断のためのテストの結果を教科部会で検証し校内研修で分析課題の共有化を図った。年度内に学習の積み残しがないようにするために、分析された課題を克服するための具体的な取り組みを推進する。

(2) 生徒の自己肯定感と学ぶ意欲を高めるてだて

ア 時間割編成上の工夫

学年主任会、生徒指導部員会等の各種会議を週時程に位置づけ、組織目標具現化のための情報交換と共通理解の徹底を図った。また、教科部会を時間割の中に位置づけることで学力の向上に努めた。時間割編成を工夫することで業務の効率化を図り、生徒と関わる時間を確保した。

イ 校内研修体制の見直し

研修体制の見直しを図った。指導案を、題材名、単元名と目標、参観の視点を示すだけの簡単な形式とした。参観のポイントを、評価カードにまとめたものに統一し、研究協議では、小集団による話し合いを通して、職員の授業力の向上を図っている。研究協議会も、全体で意見を出し合う一斉形式のものを廃止し、テーマ毎の小グループによる研究協議会にすることにより活発な意見が出されるようになった。表面的な反省のみならず、自分たちならどのように指導を行うかについての考えが深まった。



ウ 守中授業メソッドの徹底

教師が授業に際して守るべき規律を共通言語化した「守中授業メソッド」を職員間で徹底させ授業改善に努めた。自尊感情を育てる場面は授業の中にある。授業に対する統一した方針を校内研修で必ず確認し、日常的な指導に当たることを徹底した。

(3) 生徒の実態にあった具体的な学習指導の推進

ア 実力アップ朝テストの取り組みについて

実力アップ朝テスト（漢字力、計算力、英語力）を月に2回設定した。実施2週間前から、出題内容を示した対策プリントを配付し、スモールステップの学習を実施することで、「できる」「わかる」喜びを味わわせ、主体的に学ぼうとする姿勢を育てた。

イ 家庭学習のてびきの活用

本校では2年前より学力向上に向けての具体的な学習方法をまとめた「家庭学習のてびき」を作成し全生徒向けに配付している。活用率の伸び悩みが課題であったが、各学年の家庭学習指導の推進により、活用率が向上してきた。

ウ 補充的学習の時間の確保

テスト直前補充的学習会を定期テスト前3日間、重点的に実施した。夏季休業中は、実力アップサマー学習会として、全学年の生徒が、原則として全員参加の基礎コース3日間と、希望者による発展コース2日間の計5日間を行い学力向上に努めた。各学年主任及び、学力向上対策委員が中心となって専用のテキストを作成し、基礎基本の定着を図るなど、創意ある内容の有意義な学習会になった。



3 考 察

(1) 生徒課題の共有化について

生徒の実態把握のための調査を行うことで、数値的側面から把握でき、改善ポイントが明確になった。また、具体的な分析結果を提示したことで、全職員が同じ情報をもとに的確な指導をしようとする意識が高まった。本校独自の学力分析シートを作成することで、教師自らの指導を振り返ることができ、職員の学力向上に関する意識が高まった。

(2) 生徒と関わる時間を確保し、学ぶ意欲を高める手立てについて

会議システムの精選など業務の効率化を推進する事で、職員が生徒と関わる時間を確保することができた。補充的学習の時間を教育課程の中に組み入れることで、生徒の個に応じた指導を充実させることができた。校内研修体制を見直したことは、研究協議の活性化につながり、職員一人一人が学力向上に対する意識を高めることに有効であった。

(3) 生徒の実態にあった具体的な学習指導の推進について

スモールステップで継続した学習をねらいとした実力アップ朝テストを今年度は月に2回実施した。事前に配付する出題内容プリントは家庭学習の定着にもつながった。日常的に学習に取り組ませやすいため、職員の学力向上に対する意識も高まった。「家庭学習のてびき」の活用を各学年主任が中心となり推進していくことで、確かな学力のある生徒育成のための各情報を整理し、具体的な学習方法について全職員に共通認識することができた。

4 課 題

学力の向上において重要視された「分かる授業づくり」に向けて、組織目標が具現化されているか授業の在り方を見直してきた。校内研修体制を見直し、研修の在り方や授業を大切にできる家庭学習の在り方を追求することで、学力向上という組織目標の具現化に取り組んできた。その結果、県学力診断のためのテストでは、各学年とも県の平均を上回ることができた。全体的な学力の底上げについては徐々に効果を見せてきているが、具体的には、考察をまとめたり、自分で考えて問題を解決しようとしたりする部分については課題がある。そこで、自分の意見を書いたり相手に伝えたりする指導を増やす必要があり、各教科での分析を具体的に生徒の指導に生かす具体的な施策についてさらに検証を深める必要がある。また、学力向上に関する様々な施策はあるが、その検証が十分になされないものもあることが反省として指摘されている。それぞれの実践については、十分検証しながら、分かる授業づくりをめざし職員一人一人の資質の向上に努めていきたい。

地域で支える学校づくり推進事業

守谷市立愛宕中学校

1 はじめに

本校では、「優れた品性と豊かな知性を持ち、活力にあふれ、たくましく生きる生徒の育成」という教育目標の実現に向け、「わかる授業の実践と基本的な生活習慣の定着による、生徒個々の自己教育力（主体的に学習する力・よりよく生きる力。心身の健康安全を向上させる力）の育成を図る」という組織目標を設定し、全教職員一丸となって教育活動を展開している。

中でも、重点施策の一つに「積極的な情報発信と保護者・地域との連携・協力」を掲げ、地域の人材資源を積極的に活用し、教育活動の活性化を図っている。「地域で支える学校づくり推進事業」の指定を受け、スクールサポーター制度の整備を進めることによって、より地域の教育力を活用し、信頼される学校づくりを進めていきたいと考えた。

2 実 践

（１）サポート内容の検討

全校で地域との連携を図るという共通理解のもと、教科部会や特別活動部会でサポート内容について検討をし、以下の３つの内容についてサポートをいただくことにした。また、サポーターの募集については、学校だよりやホームページ、PTA役員会などの機会をとらえて保護者・地域に知らせ、理解を得るようにした。

ア スクールサポートの内容

・花と緑サポート

花づくりや花壇整備への協力、除草や樹木剪定への協力

・家庭科実習サポート

家庭科での裁縫（ミシン）実習、調理実習の補助

・生徒の見守りサポート

登下校の安全指導（交通、不審者）

マナーアップ運動への参加（あいさつ運動、ごみ拾いなど）

イ サポート活動の流れ

① スクールサポーターとして登録する。

申込用紙を提出していただく。受け付けは随時行う。

サポーター用の名札を用意し、いつでも学校に来ていただき教育活動の様子を見ていただくことができるようにする。

② サポーター通信で活動の日時、内容について確認する。

登録いただいた方に、毎月「サポーター通信」を配付する。（HPにも掲載）

「確認用紙」に参加できるサポート名と期日を記入し、提出していただく。

③ サポーターとして参加する。

サポート内容の詳細については、当日打合せを行う。

(2) 地域の教育力の活用

ア 花と緑サポート

夏に校舎前花壇のマリーゴールドとサルビアの苗の植え付けと雑草取り，秋にビオラの苗の植え付けと樹木の剪定をしていただいた。生徒の委員会活動だけでは，なかなか手が行き届かない所まできれいに整備していただき，来校した保護者の方からも，「花壇の花や樹木の紅葉を見るのが楽しみ」との声を数多くいただいた。



【苗の植え付け】



【雑草取り】

イ 家庭科実習サポート

家庭科の被服（ミシン）実習と調理実習で，学習ボランティアとしてお手伝いをいただいた。ミシンの実習では，機器の調整や個別の指導にあたっていた。また，調理実習では，火気，用具，材料などの取扱いについて指導の補助をしていた。サポートのおかげで，効果的な指導がなされ，生徒にとって学ぶ楽しさや成就感がより実感できるようになった。



【被服実習】



【調理実習】

ウ 生徒の見守りサポート

月曜日の下校時を中心として，一時停止箇所や坂道などの危険箇所の立哨指導の手伝いをいただいた。また，11月のいばらき教育月間には，生徒とともに正門で朝のあいさつ運動にも参加していただいた。生徒の安全に対する意識や，あいさつに対する意識が一層高まった。

3 おわりに

本校学区にはさまざまな教育資源があり，これらを有効に活用していくことで，子どもたちの「生きる力」が育まれる。また，地域の教育資源の活用は，地域と学校をつなぎ，保護者・地域住民との連携を深める重要な機会になる。本事業をきっかけとして，地域の教育力を活用し，さらに信頼される学校づくりを進めていきたい。

特色ある学校づくり ― 校内研修を通して ―

守谷市立御所ヶ丘中学校

1 はじめに

本校の生徒は、自分をさらけ出して素直に自己表現することが苦手である。生徒に共通することとして、物事をよく考え、判断・整理し、考えをわかりやすく適切に相手に伝える能力、すなわち表現力が不足している。平成23年度に実施した学力診断テストでは、多くの教科において正答率が平成22年度と比較して高くなったが、記述による問題の正答率が低かった。表現力をさらに高める必要がある。

新学習指導要領（平成20年3月告示）では、生徒の思考力や判断力、表現力を育む観点から、全教科領域等において言語活動を充実することを示している。

これらのことから、本校では、教科等の特性を生かした言語活動の工夫を通して生徒の表現力を高めていこうと考えた。さらに、表現力を高めることをねらいとする授業実践を通して、確かな学力や生きる力も身につけさせたいと考えた。

本年度は、新学習指導要領の完全実施の年でもあり、授業相互参観や新しい年間指導計画の検討・見直し等を含め研究を進めた。

2 実践

(1) 研究テーマ

表現力を高める授業の創造

― 教科等の特性を生かした言語活動の工夫を通して ―

(2) 研修計画

月	研修内容	
5	・研究推進部	【本年度の研究テーマの確認・研究計画の検討】
6	・教科部会	【本校の生徒の実態の確認と課題の共通理解】 ・生徒の実態、各教科で高めたいと考える表現力
7	・教科部会→研究推進部 ・研究推進部 ・個人→教科部会	【実態調査】 ・各教科で高めたい表現力をもとにアンケート項目の作成と実施と集約 【研究授業指導案様式検討】 【研究授業指導案作成①】 ・アンケート結果をもとに指導案の素案作成 【第1回授業相互参観実施】
8	・教科部会→全体会 ・個人→教科部会	【教育思潮（言語活動）の報告と共通理解】 ・各教科の代表から言語活動に関する報告 【研究授業指導案作成②】 ・指導案の検討
9	・個人 ・個人 ・個人	【研究授業指導案作成③】 ・指導案の確認・修正と提出 【第2回授業相互参観実施（研究授業前後）】 【研究授業（9月25日、計画訪問）】 ・研究授業
10	・個人→教科部会（教科主任）	【第3回授業相互参観実施】 【研究授業の成果と考察】 ・教員・生徒による授業評価と計画訪問による指導をもとに授業実践報告を作成（報告書、指導案・

		教材等をデータベース化)
11	・ 全体会 ・ 教科部会	【第4回授業相互参観実施（研究授業前後）】 【研究の成果と考察についての報告】 【年間指導計画等の確認と修正】 ・ 指導内容，実施時期，評価等の確認と修正。
12		
1	・ 各担当 ・ 個人	【第5回授業相互参観実施】 【学力診断テストの実施と集計】 【第2回授業相互参観実施】
2	・ 各担当 ・ 研究推進部 ・ 次年度検討委員会	【学力診断テストの分析】 【研究のまとめ】・ 研究のまとめと市への報告書作成 【次年度の研究テーマ等の検討】
3		

(3) 授業実践事例

① 社会 第1学年 単元名「世界各地の人々の生活と環境」

単元を通してのテーマを「…家族に留学先の様子を説明しよう」と設定して，身近な生活と結びつけて追究していけるようにした。資料の読み取りにおいても身近な事象に関する資料を中心に提示して，生徒の関心を高め，そこで得たことを手がかりとして地域全体の生活や環境の特色をとらえるようにした。多くの生徒に課題追究に対して意欲の高まりが見られた。資料の読み取り方については，計画的・段階的に指導した。情報が多様になり，視点を明確にし整理することができない生徒がいたが，グループ学習やペア学習などでの意見交換を通して，考えを深め，文を書けるようになり，表現力が高まった。

② 理科 第2学年 単元名「生命を維持するはたらき」

表現力を高めるための手立てとして，以下の3点に絞って授業を行った。「実験結果を分析し解釈する話し合い活動の充実により思考を深める」，「定型文を中心とした表現技能の習得と根拠を明確にして説明できる様にワークシートを作成する」，「前時で立案した実験を行った後，ITCを活用してプレゼンを行う」。成果としては，この3点を取り入れたことで，実験後の話し合い活動が充実し，ワークシートも定型文に基づいてしっかり書くことができたり，プレゼンを上手に行ったりできた。表現力を高める授業ができたのではないかと思われる。

(4) 授業相互参観

授業相互参観を実施するに当たって，「様々な指導方法を知り，指導力の向上を図る」，「生徒の学習状況等の生徒の実態を知る」をねらいとし，以下の方法で実践した。

- ① 原則1人1回（第1回～第5回のいずれか1回）授業公開。
- ② 学年ごとに授業公開者を（可能であれば）5つの実施期間に振り分ける。
- ③ 授業公開の予定を，授業公開一覧表，週予定表，職員室黒板で知らせる。

3 成果及び今後の課題

- (1) 新学習指導要領の重要事項である「言語活動」に関する校内研修を実施し，「言語活動」と本校の「表現力の向上」との関わりについて考えることができた。また，生徒に身につけさせたい表現力とはどういうものなのかも教科の特性に合わせてより具体化してきた。学力診断テストでは，1学年での表現力の伸びが十分とはいえなかった。次年度も引き続き「表現力の向上」に向けて実践研究を進めていきたい。
- (2) 教科や学年の枠を外した授業参観は有意義であり次年度も行いたいという意見が多くあった。今後教科の枠をはずし共同での教材研究や教材作成の場を設定し，授業相互参観をしたいという前向きな意見もあった。次年度は，授業相互参観がより充実するように実施方法を改善していきたい。

「主体的に考え、表現しようとする生徒を育成する学習指導の在り方」 ～各教科における言語活動を通して～

守谷市立けやき台中学校

1 はじめに

本校では、平成23・24年度の2カ年にわたり、守谷市教育研究会指定の研究に取り組んだ。研究テーマ「主体的に考え、表現しようとする生徒を育成する学習指導の在り方 ―各教科における言語活動の充実を通して―」のもと、本年度11月16日に研究発表会を行った。

本研究における「主体的に考え、表現しようとする」とは、生徒の主体的学習に取り組む態度を基盤とし、基礎的基本的な知識及び技能を活用して、思考、判断したことを表現することを意味する。「考える」と「表現する」とは、それぞれ別々の力としてとらえるのではなく、それぞれが有機的に結び付いた総合的な力としてとらえることが大切である。自分が思考・判断したことを、表現することで、整理したり明確化したりするとともに、自他の考えを広げたり深めたりすることにつながる。すなわち、思考、判断と表現は相互に作用し合い、総合的に高まっていくと考えられる。

教科の指導においては、各教科の特性を考慮し、適切な言語活動を通してそれらを育成していく必要があると考える。

2 研究の経過

平成24年度の主な研究の経過は次の通りである。

6月13日（水） 計画訪問

◇講師 守谷市教育委員会教育長 後藤 光良 先生
守谷市教育委員会指導室長 石井 良秋 先生
守谷市教育委員会指導主事 田崎 均 先生
〃 長塚 和徳 先生

7月4日（水） 要請訪問(1) 【数学科授業研究】

◇講師 茨城県教育研修センター教科教育課指導主事 櫻井 良種 先生
◇授業者 1年5組 高城 佑佳 教諭「方程式」
3年5組 上條 法之 教諭「平方根」

7月18日（水） 要請訪問(2) 【技術・家庭科授業研究】

◇講師 守谷市立御所ヶ丘中学校教諭 水柿 克巳 先生
守谷市立守谷中学校教諭 佐藤志津子 先生
◇授業者 1年2組 左近 史稔 教諭「製作品の設計・製作」
2年2組 藤枝 里衣 教諭「私たちの消費生活」

9月24日（月） 要請訪問(3) 【美術科授業研究】

◇講師 茨城県教育研修センター教科教育課指導主事 近重 敦子 先生
◇授業者 2年3組 真鍋 由紀子 教諭「鳥獣人物戯画を楽しもう」

9月28日（金） 要請訪問(4) 【英語科授業研究】

◇講師 茨城県教育研修センター教科教育課指導主事 茂在 哲司 先生
◇授業者 1年3組 川上 優紀 教諭「Unit 6 ベッキーのおばあちゃん」
長山 理絵 教諭（少人数指導）
2年3組 江原 邦章 講師「Unit 5 A New Language Service」

10月10日（水） 要請訪問(5) 【理科授業研究】

◇講師 守谷市教育委員会指導室指導主事 長塚 和徳 先生
◇授業者 1年5組 池田 みゆき 教諭「物質の状態変化」
2年4組 加々美 益樹 教諭「動物のなかま」
古谷 淳一 講師（少人数）

- 10月15日（月） 要請訪問(6) 【国語科授業研究】
 ◇講 師 利根町立利根中学校校長 飯田 文夫 先生
 ◇授業者 3年5組 大越 茂 教諭「誌の表現の特徴をとらえよう」
 2年3組 岡本 佳与 教諭「古人の思いを知る」
- 10月17日（水） 要請訪問(7) 【社会科授業研究】
 ◇講 師 守谷市立松前台小学校校長 小林 清 先生
 ◇授業者 1年3組 樫村 鉄朗 講師「世界の諸地域」
 2年3組 片岡 正美 教諭「欧米の進出と日本の開国」
- 10月18日（木） 要請訪問(8) 【音楽科授業研究】
 ◇講 師 守谷市愛宕中学校 教諭 内田 有一 先生
 ◇授業者 1年3組 櫻井 あかね 教諭「混声3部合唱の表現」
- 10月24日（水） 要請訪問(9) 【保健体育科授業研究】
 ◇講 師 坂東市立中川小学校校長 古谷 勲 先生
 ◇授業者 2年3・4組（女子） 横尾 香織 教諭「ダンス」
 2年3・4組（男子） 大原 雅広 教諭「柔道」
 市毛 知明 教諭（T T）



【理科の公開授業より】

電子黒板を使って、具体的に視覚でとらえ、考察している様子。



【社会科の公開授業より】

グループになり、互いの考えを交流し合っている様子。

3 成果と課題

今年度の研究を通して、次のような成果と課題が明らかになった。

(1) 成果

- 各教科でとらえた「言語活動の充実」を基に、ねらいを達成するための言語活動を考え、授業に取り入れたことで、生徒は他者とのかかわりを通して学習内容を理解したり、自分の考えを深めたりしようと学習に前向きに取り組むことができた。
- パフォーマンス評価を取り入れたことで、教師は生徒の思考力・判断力・表現力、基礎的・基本的な知識及び技能の定着度を見ることができ、個への対応や以降の学習指導に役立てることができた。

(2) 課題

- 自分の考えを整理して話す力が十分には身に付いていないと考えられる。そこで、生徒の発達段階に応じた表現方法を習得、活用するための学習指導方法を究明していく必要がある。
- 教科間の連携の下に言語活動を行うことで、生徒の思考力・判断力・表現力をより向上させることができると考えられる。そこで、全教科で3年間を通して行う言語活動の一覧表を作成し活用していくことが求められる。

情報教育



学校教育における情報教育全体計画

守谷市教育委員会

高度情報通信ネットワーク社会形成基本法の施行（平成 13 年 1 月）

「e-Japan 戦略」「IT 新改革戦略」「i-Japan 戦略 2015」

文部科学省 学校教育の情報化推進計画

【教育課程】 【ハード面整備計画】 【ソフト面整備計画】

守谷市情報化基本計画 e-ふれあいタウン守谷計画

守谷市スクールコミュニケーション整備

守谷市学校情報教育推進基本目標

学校情報化アクションプラン

「新たな情報通信技術戦略（平成 22 年 5 月）」「新成長戦略（平成 22 年 6 月）」

教育の情報化ビジョン（平成 23 年 4 月）

～21 世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指して～

「教育の情報化」の目的

- ① 子ども達の情報活用能力の育成
- ② 各教科等の目標を達成する際に効果的に情報機器を活用すること

情報教育の目標としての「情報活用能力」

＜情報活用の実践力＞

課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力

＜情報の科学的な理解＞

情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解と、情報を適切に扱ったり、自らの情報の活用を評価・改善したりするための基礎的な理論や方法の理解

＜情報社会に参画する態度＞

社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度

小学校	中学校
・総合的な学習の時間や各教科でコンピュータや情報通信ネットワークを活用 ・情報モラル教育の充実	・技術家庭科「情報とコンピュータ」を必修（発展的な内容は生徒の興味関心に応じて選択的に履修） ・総合的な学習の時間や各教科でコンピュータや情報通信ネットワークを活用 ・情報モラル教育の充実

＜各教科における情報活用能力を育成する学習活動＞（情報教育の指導の手引き参照）

情報教育の実践

守谷市立大井沢小学校 担当 小林 直也

1 はじめに

本校では、国語、社会、算数、理科においてデジタル教科書を導入している。デジタル教科書や情報機器を効果的に使えるように授業を進めてきた。

通知表や指導要録電子化に伴い、成績処理がスムーズに進められるように研修を進めた。

本報告では、今年度本校で行われた取り組みについて紹介し考察する。

2 実践

(1) デジタル教科書等を使った授業

電子黒板やプロジェクター等の教育機器を使つての授業は、準備に時間がかかるので普段の授業の中での使用率は少なかったが、デジタル教科書を全学年導入し、昨年度は、各教科の研修を行ったせいもあり、使用率も上がってきた。

ア 国語

新出漢字の筆順の機能がある。一画ずつ順番に表すことができ、子どもたちも視覚的に捉えることができるので毎日の授業の中では、便利な機能である。また、物語文や説明文の音読の機能もある。実際に教科書を読んでいるようにページが捲られていくので聞くだけでなく、どの箇所を読んでいるかもわかりやすい機能である。



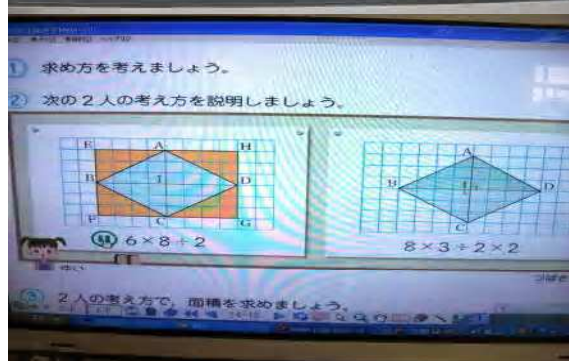
イ 社会

5年生の「自動車をつくる工業」では、自動車の組み立てラインの動画は自動車の生産の工夫がよくわかるようになっていてとても参考になった。グラフや〇〇さんのお話も動画になっており、資料としてとても有効であった。



ウ 算数

面積、合同、多角形などの図形の単元では、コンパスや定規、分度器を使つての図形の書き方や多角形の角の大きさなどを視覚的に捉えることができ子どもたちは、容易に理解することができた。



エ 理科

5年生の「流れる水のはたらき」では動画で水の流れがよくわかり、まとめの段階で使うことにより、より理解を深めることができた。

(2) プロジェクター等の教育機器を使った授業

ア 国語のまとめ

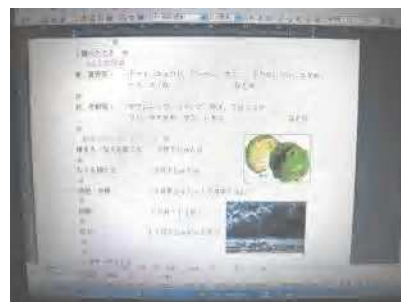
グループや個人でまとめたことを発表する時にプロジェクターや電子黒板を使って資料を提示することにより発表する内容がより聞き手に伝わる効果があった。視覚的な資料を使うことで発表者も聞き手も学習に意欲的に取り組むことができた。



イ 総合学習でのまとめ

5年生では、総合学習のまとめで、ワープロソフトを使い、画像の取り込みの学習を行い、「産業調べ」をレポートにわかりやすくまとめることができた。

また、レポートの発表会では、コンピュータ室の各パソコンにデータを送り、一人一人が自分のレポートについて発表することができた。



(3) 通信票について

本校では、4年前より通信票は電子化されている。エクセルでのデータ入力や処理がスムーズに行えるように研修を深めた。

(4) 指導要録電子化について

指導要録電子化に伴う研修を全職員で行った。その際、個人情報の取り扱いについても周知徹底を図った。

3 実践についての考察と課題

- デジタル教科書は授業改善のためにも有効である。研修においても職員は目的意識をもって高い意欲で研修していた。しかし、活用する際には、ポイントを絞ってより効果的な使い方についての研修を積み重ねる必要がある。また、電子黒板の特色を生かした使い方ができるように研修を進めていきたいと考える。
- 指導要録の電子化に伴う研修は、今年度だけでなく今後も継続して行っていく必要がある。またその際には、個人情報の取り扱いについての研修もセットで行い、職員の個人情報の取り扱いに対する意識を高め維持していかなければいけない。

情報教育の実践

守谷市立大野小学校 担当 斉藤 篤子

1 はじめに

本年度、ICTの先進校を視察する機会を得て、その環境の素晴らしさに驚いた。環境が整っているだけでは教育効果を上げることはできない。ICT機器をどう活用するのか日々研修である。また、今では家庭でもインターネットをはじめ、学習端末機器を日常的に利用している。

本校では、本年度、算数と理科のデジタル教科書と図工の鑑賞デジタル教材を購入して、電子黒板の活用も増えた。児童の情報活用能力を育成するために、スタディーノートや一太郎スマイルと合わせて電子黒板の使い方についての職員研修を行い、積極的に機器を活用した。

学年に応じて統合ソフトやワープロソフトを使って学習をまとめたり、インターネットを活用して情報収集をしたり、総合的な学習の時間でプレゼンテーションを取り入れたりした。また、道徳や特別活動の時間に情報モラル教育について取り組んだ。

2 実践

(1) 目標

低学年…コンピュータ操作や文字入力の仕方を知ることができる。
 中学年…インターネット活用や必要に応じた情報収集の仕方を知ることができる。
 高学年…目的に応じた情報の収集・判断・処理ができる。収集した情報を活用し、ワープロソフトを使ってまとめ、簡易プレゼンテーションを行うことができる。

(2) 実践

学年の系統性を考慮しながら、教科・領域において積極的に情報機器の活用を図った。

学 年	教科・単元	使用ソフト	活 動 内 容
1 年	算数 生活「お絵かきをしよう」 道徳「ゲームの時間」	デジタル教科書 ジャストスマイル インターネット	・課題提示，説明 ・コンピュータの起動・終了方法を知る ・マウスの使い方を知る
2 年	算数 生活「まち探検」 「お正月遊び」 道徳「ゲームの時間」 図工「未来のマシン」	デジタル教科書 インターネット インターネット ペイント	・課題提示，説明 ・コンピュータに触れ，操作方法を知る ・言語入力の仕方を学ぶ ・インターネットの情報収集の方法を学ぶ ・情報社会の危険から身を守る
3 年	算数・理科 国語「町の行事」 理科「風やゴムの働き」 「植物の育ち方」 図工「CGを描こう」 「作品鑑賞」 「シールと名刺作り」 総合「身近な生き物を探そう」 道徳「ゲームの時間」	デジタル教科書 インターネット デジタル教材 ペイント DS 一太郎スマイル インターネット インターネット	・課題提示，説明 ・ホームページ検索で調べる ・教材CDの視聴をする ・科学の絵コンクールに応募する ・DS i と発表機能で鑑賞する ・ソフトの使い方を知り制作する ・HP検索でテーマについてまとめる ・情報社会の危険から身を守る
4 年	算数・理科 社会「茨城県を知ろう」 総合「米について調べる」 「米作り体験活動まとめ」 道徳「情報モラル」 特別活動「タイピング練習」	デジタル教科書 インターネット インターネット スタディーノート DVD ポケモンCD	・課題提示，説明 ・県内の歴史について調べる ・米に関わる内容について調べる ・プレゼンテーションで学習のまとめをする ・情報社会の危険から身を守る
5 年	算数・理科 各教科、道徳 総合「環境調査」「少年自然の家」 特別活動「情報モラル」	デジタル教科書 NHK デジタル教材 インターネット DVD	・課題提示，説明 ・事前学習，まとめる。 ・情報収集 ・不適切な情報に対応する

学 年	教科・単元	使用ソフト	活 動 内 容
6 年	算数・理科 国語「大切にしたい名言」 「作者について調べる」 「資料を使って調べる」 社会 「日本と関係の深い国」 「知覧特攻平和記念館」 理科「地層」 総合 「修学旅行事前調査」 「国会議事堂を調べよう」 「江戸東京博物館を調べよう」 特別活動「情報モラル」	電子教科書 インターネット インターネット インターネット ジャストマイル インターネット インターネット DVD	・課題提示，説明 ・名言について調べまとめる ・情報収集，分析をしてまとめる ・分かりやすく資料提示をする ・活動計画と意見交換をする ・活動をまとめ情報の共有をする ・事前の情報収集で関心を高める ・情報を正しく安全に利用する
特別支援学級	国語「筆順」 算数「算数アプリ」 「ネットで算数」 統計グラフ	I p a d I p a d インターネット エクセル・ポイント	・動画で筆順を覚える ・算数プログラムで楽しく学習する ・統計グラフコンクールに応募する
特別活動	コンピュータクラブ作品	アニメーション	・簡単なプログラムで制作する

- (3) ICT活用授業 平成24年10月4日（木）
 (株) シャープより学習端末DSの貸与により図画工作科の絵画作品鑑賞を行った。DSのカメラボードと手書きボードを使って、感じたことを え 合 い の を し み を め た。



- (4) ホームページリニューアルと研修 平成24年10月24日（水）
 ICT 活用サポート支援員派遣事業を利用してホームページをリニューアルしたのち，画像処理やアップロードの仕方の職員研修を行った。常に新しい情報の発信に心がけ，保護者や地域の方々に学校の活動を理解，支援してもらえるような内容を心がけている。メールマガジンの登録は9割以上で，不審者情報や下校時刻の変更，緊急な連絡を迅速・丁寧に配信している。

- 3 考察
 教科・領域で，積極的にコンピューターを活用しており，低学年からコンピューターに慣れ親しむことによって，抵抗なく操作が行えるようになってきた。インターネットを活用し，短時間で必要な情報を収集し，まとめ方の工夫もみられるようになってきた。
 NHK デジタル教材やデジタル教科書の利用価値も大きい。難しい実験や，手に入りづらい資料や動画も見ることができ，児童の興味を引いている。

- 4 課題
 情報機器の活用により，授業の効率化が図れるようになってきた。そして，活用についての研修も行っているが，機器を使うだけでは，もちろん改善されない。指導のねらいに応じた効果を考え，改善を重ねていく必要がある。最近の機器は家電同様に誰でも操作しやすいように開発されているが，それに伴って，使う側の情報モラルが重要になってくる。氾濫する情報の中から正しい情報を見つける判断力を身に付けさせ，安易に情報を扱うことの怖さを教えていねいに教える必要がある。そこで，情報教育推進のための企画，計画，運用体制を整えていくことが課題と捉えているが，情報教育コーディネータ配置の必要性を感じる。

情報教育の実践

守谷市立高野小学校 担当 高橋 茂夫

1 はじめに

今回の学習指導要領の改訂では、各教科等の指導における教員による ICT 活用、児童生徒による ICT 活用のいずれについても充実が図られることが明記された。児童生徒による ICT 活用については、知識・技能の活用を図る学習活動や探究的な学習活動、また、これらの基盤となる言語活動において、教科の目標を達成するための効果的な ICT 活用について示され、児童生徒が効果的に ICT を活用する学習活動を通して教科の目標を達成すること、さらに、子どもたちの情報活用能力の育成を図る機会が充実することが強調されている。本校でも、ICT 活用を通して各教科等の目標を達成することと、児童の情報活用能力の育成に視点を置いて実践を継続してきた。

2 実践

(1)各学年における主な ICT を活用した授業実践

年	ICT を活用した授業	ICT 活用の効果や成果
1	＜図工＞好きな動物を制作する際、導入で遠足（東武動物公園）の画像を <u>P C</u> → <u>電子黒板</u> を用いて投影した。	・遠足で実際に見たりふれたりした動物の画像を振り返ることで、学習意欲が高まった。
2	＜国語＞新出漢字の筆順について、 <u>デジタルコンテンツ</u> （「漢字ひつじゅん君」）を活用し、 <u>電子黒板</u> を用いて定着を図った。 ＜算数＞かけ算の導入部において、 <u>パワーポイント</u> を用いて教材を作り、授業を行った。	・筆順の画像を見ながら、繰り返し指書き、なぞり書きに取り組みせることで学習意欲を高めるとともに定着させることができた。 ・「何人ずつ」「何台分」といったかけ算の意味を、画像を変化させていくことで定着を図り、効果的に理解させていくことができた。
3	＜理科＞モンシロチョウの成長の様子を解説する <u>デジタル教材</u> を、 <u>電子黒板</u> で視聴しながら学習した。 ＜図工＞他の学校の児童の参考作品を <u>電子黒板</u> に写しながら指導の補助資料とした。 ＜総合＞各児童の学習課題について、関連する情報・資料を <u>P C</u> （ <u>インターネット</u> ）で集めた。発表会では <u>電子黒板</u> を用いて各児童が発表した	・モンシロチョウの成長の過程などを映像で具体的に視聴することができ、理解を深めることができた。 ・初めて水彩絵の具だけで絵を描く学習だったので、描き方を理解させるために効果的な補助資料となった。 ・児童は意欲的に情報収集に取り組み、学習に必要な情報源としてのインターネットの重要性に気付いていった。
4	＜算数＞面積の学習において、教科書の問題をスキャンし、 <u>電子黒板</u> に写して課題解決学習に活用した。また、 <u>電子ペン</u> を用いて児童が解答を書き込んだり、単位に関する練習を行った。	・学習内容への関心が高まり、意欲的に学習に取り組んだ。電子ペンを用いることで、児童の考え方などを全体で共有し、学習の深まりに生かすことができた。

 ← 4 年 算 数 ＜保体＞保健学習において，児童が調査し，グラフにした内容を電子黒板に写して発表した。二次性徴について，パワーポイントを活用して説明し，またクイズ化した内容を提示，活用した。	・グラフなどの資料を大きく作成する必要がなく，児童が手軽に活用することができ，児童主体の授業を行うことができた。クイズ化した内容も同時に全体で確認，共有できるので基礎基本が定着した。  ← 6 年 学 活
5 ＜国語＞各児童が写真を持ち寄ってスピーチを行う学習で，<u>実物投影機</u>を用いて<u>電子黒板</u>に写真を写しながらスピーチを行った。 ＜家庭＞五大栄養素を理解する学習で，その役割を電子黒板を用いて提示するとともに，ウェブサイト上の<u>コンテンツ</u>（食育ゲーム）を活用して理解の定着を図った。	・スピーチ中，写真を見せたい場面を判断，選択して電子黒板に写したため，話す際の演出性が高まり，聞く側の関心も高まった。 ・マンガ風の資料やゲーム形式のコンテンツを活用することにより，楽しくかつ分かりやすく学習を進めることができ，理解も深まった。
6 ＜外国語＞アメリカの州について，児童が選んだ州の特徴や有名なものを <u>P C</u>（<u>インターネット</u>）を用いて調べ，分かったことを英語で発表した。 ＜学活＞県警安全課の方をゲストティーチャーとして招き，携帯電話やインターネットの使用上の注意点などについての<u>情報モラルに関する学習</u>を行った。	・インターネットで収集した情報（画像等）を発表に取り入れることで，効果的にプレゼンテーションできることを児童は実感した。 ・情報モラルの意識の向上につながった。フィルタリングについての話もあり，一緒に参加した保護者の意識化にも効果があった。

(2) 特別活動の場面で

- ・本校にはコンピュータクラブがあり，21人の児童がスタディノートを使って自己紹介カードを作成したり，スタディノートポケットを用いて他のクラブ活動の活動の様子を取材し，記事にまとめたりしている。
- ・各委員会活動の一環として行う児童集会でも，お知らせや様々な画像などをP Cを通してプロジェクターで投影して発表するなど，積極的に機器を用いている。

3 考察

今年度，デジタル教材を視聴するためのソフトの再インストールが遅れたが，その後は各学年とも電子黒板の活用を中心に，ICTを活用した学習が展開された。スタディノートの個人登録再設定も行ったが，コンピュータ室での学習は十分とは言えなかった。また，電子ペンの活用も実践，実績が十分とは言えず，職員間の研修が必要と感じた。個人で作成したデジタル教材の保存活用・共有化も必要であろう。

4 課題

情報教育の指導計画（情報モラルも含む）の見直しと，計画に沿った実践の蓄積を図り，6カ年を意識した取り組みが必要と考える。職員研修で，P C室のスクリーンや電子ペン，その他のICT機器を活用した授業について研鑽を深めたい。

情報教育の実践

守谷市立守谷小学校 担当 根本 尚希

1 はじめに

守谷市は、電子黒板など、情報教育分野の機器の導入については、充実した環境を維持することができている。教育の情報化が学校教育に求められている昨今、本校においても、各教科や総合的な学習の時間などに情報機器を効果的に活用し、主体的に学ぶ児童の育成を目指し、取り組んでいる。

また、通知票や指導要録の作成など、児童の指導にあたっての校務についての電子化も進められている。校務の軽減が進められる中で、情報化が大きな役割を担っていると考えられる。

2 授業での実践

(1) 算数での実践 「2年 数の大小」



「数の大小」では、2つある任意の3桁の整数の十の位に、様々な数字を入れて数の大小を考えるという学習を行った。

実物投影機とプロジェクターを使って、児童のノートを拡大し提示しながら発表活動、考えの検討を行った。この方法は、ノートに書いたことを、改めて発表用に書き直す必要がなく、そのまま投影することができるので、特に低学年の学習に有効であると考えられる。

(2) 理科での実践 「6年 土地のつくり」

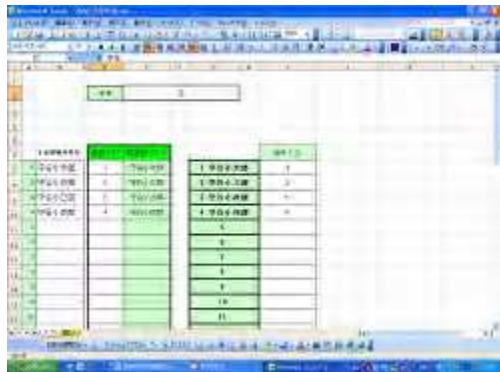


「土地のつくり」の学習では、コンピュータ室を活用し、NHK for School (<http://www.nhk.or.jp/school/>)にある動画を見ながらの学習を行った。各自がサイト内にある動画を選んで視聴するようにした。このサイトには短いクリップがいくつも用意されており、意欲的に学習を進める姿が見られた。土地の変化や、天体の変化など、実際には長い時間が必要な実験・観察を動画を通して、目で見ることができるので、児童の理解も深まった。

3 校務における情報化

(1) 賞状等の作成

児童の努力と成果をたたえる賞状や認定証の作成において、Excel ファイルを活用している。名簿からマクロを活用して個人に応じて文面を変えながら賞状を作成することができるものである。



①名前や項目、文面など必要事項を入力する。
(文面を一覧で作成し、個別に設定できる。)

②印刷ボタンをクリックするとマクロが起動し、印刷が開始する。その際、個人に応じて文面が自動的に変更される。

(2) 面談・家庭訪問予定作成

本校では、家庭訪問や保護者向けの個人面談を行っている。各家庭に時間帯の希望をとり期日を調整し、再度、各家庭に書面で知らせる。その際の、教職員用の予定表と家庭向け文書の作成を Excel ファイルを活用して行っている。



①名簿に名前を入力し、決定した時間帯に該当児童の出席番号を入力する。



②児童名が入った予定表が自動的に作成される。



③児童名と日付、時間帯が入った保護者向けの文書が自動的に作成される。

4 課題

校内でのICT活用が定着してきている。ICT活用に関するアンケートを本校職員に行ったところ、「準備が大変である」という回答が65%であった。ICT機器活用の本来の目的から考えると、効果を最大限発揮するためには、「いつでも」、「手軽に」、「素早く」使うことができることが必要である。そのために、情報機器の管理や活用方法を見直し、職員全員が使いやすいと感じられる環境を整備していくことが大切であると考えます。

情報教育の実践

守谷市立黒内小学校 担当 水ノ江 健

1 はじめに

今回の学習指導要領において「確かな学力」の育成について、「主体的に学習に取り組む態度を養うためには、児童生徒がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を適切に活用できるようにすることが重要である」とし、さらに「教師がこれらの情報手段や視聴覚教材、教育機器などのおおお教材・教具を適切に活用すること」が重要であることが示されている。本校でもこの考え方に基づく活用とともに、校務処理の面でも「教育の情報化」を進めている。

2 実践

(1) 情報活用能力の育成

ア ICTを活用するための基本的なスキルの育成

年間指導計画に各学年ごとのリテラシーを位置づけ、機器等についての技能習得のポイントを明確にし、系統的な活用スキルの向上を図っている。

【1・2学年】

- ・コンピュータの電源を入れたり、切ったりすることができる。
- ・マウスや矢印キーを使ってカーソルを動かしたり、クリックしたりできる。
- ・絵を描いたり、数字キーや文字キーを押して、数字やひらがな等を入力できる。
- ・デジタルカメラで撮影できる。
- ・簡単な教材（ソフト図鑑等）を使うことができる。

【3・4学年】

- ・コンピュータを使って簡単な文章を作成できる。
- ・デジタルカメラやビデオカメラ等を使って静止画や動画を撮影する。
- ・作成した文書をプリンターを用いて印刷できる。
- ・グループウェアの電子掲示板へ掲示したり、閲覧したりすることができる。
- ・インターネットを使って、WEBページを閲覧したり、調べたりすることができる。

【5・6学年】

- ・CD-ROMやインターネット等で調べたい情報を検索できる。
- ・グループウェア上のデータベースを閲覧したり、登録したりすることができる。
- ・電子メールの送受信ができる。
- ・表やグラフを作成できる。
- ・総合的な学習や教科の学習などで目的に応じてPCを活用できる。
- ・いろいろなソフトを使って簡単な生活に使うものが作れる。

イ 情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、発信・伝達できる能力の育成

【実践例】各学年「総合的な学習の時間」における調べ学習

- ・3年生 … 「守谷市」に関連する課題
- ・4年生 … 「ソバ」に関連する課題
- ・5年生 … 「コメ」に関連する課題
- ・6年生 … 「綿花」に関連する課題

各学年ごとのテーマから児童一人一人が課題を見つけ、その解決の手がかりとして、インターネットを利用した情報収集を行っている。



検索エンジン「YAHOOきっず」を中心に活用しているが、児童が疑問に思うことに対する直接的な回答が見つかることは少なく、また、記載されている内容から必要な知識を見いだすことが難しいため、文献中心の調べ学習に加え、それを確認したり、深めたりする手段として、WEBページを活用している。これにより、複数の情報源をもとに確かな知識を作り出すことや情報の信憑性などについて意識させる学習が進められている。

ウ 情報モラルに関する学習

年間計画に位置づけ、デジタルコンテンツやWebサイトを活用して、系統的な学習が進められるようにしている。平成24年度は4年生ではネット上の著作権や肖像権、5年生ではBBSやSNSなどのネット上の交流、6年生では携帯電話やサイト利用に関する学習を各担任とともに、情報担当教諭が実施した。

(2) 各教科等の目標を達成するための効果的なICTの活用

電子黒板が導入されて3年が経過し、昨年度からデジタル教科書（社会・算数・理科）が導入されてから、一層、各学年学級で日常的に使われるようになった。

ア デジタル教科書の活用

新指導要領の完全実施に伴い教科書が一新され、各教科書会社から同時に「デジ

タル教科書（指導書）」が出版された。本校でも、算数、理科、社会を全学年分購入し、日々の授業に活用している。主立った活用の場面や効果として、次のような意見が挙がっており、「わかる授業」の展開の一助となっている。

○ 1 学年…学習課題の確認と練習問題の提示

- ・教科書と同じイラストがカラーで表示されるので、一斉学習での問題把握の様子を児童の反応を見ながら確認することができた。
- ・問題文などを素早く視写させたり、テンポ良く答えさせたりすることができた。



○ 2 学年…学習課題の確認と図表の利用

○ 3 学年…算数・社会での図表、写真などの読み取り

- ・児童の視線が集まりやすく、話しあい活動が効果的に進められた。

○ 4, 5, 6 学年…デジタル教科書の挿絵や動画の利用

- ・学習内容の把握に適切な動画を利用することができた。
- ・特に社会科の学習では、短い時間で有効な学習コンテンツであった。



イ デジタルコンテンツの利用

ネット上の学習コンテンツやWEBページを利用することで、学習内容について視覚的に確認しやすくしたり、動画等を使うことでイメージ化しやすくしたりする授業が行われた。特に本年度は算数科や社会科での活用が見られ、動画やアニメーションを使って図形の求積の学習の理解を深めたり、社会科見学等で事前学習に活用されたりした。

ウ デジタルカメラや実物投影機と組み合わせての利用

児童が観察したことやノートの記述などをデジタルカメラや実物投影機で映し出すことにより、一人一人の考えを視覚化することができ、全体での共有化を図ることができた。また、映し出されたものをもとに児童が自分の考えを発表する活動にも有効な手段となっている。



(3) 校務の情報化

ア 学校WEBページの運営

昨年度5月に本校WEBページのリニューアルを行った。学校全体及び各学年に応じたページについて更新のし易さを考え、ブログの要素を取り込んだつくりにし、携帯電話からの更新を可能とした。その結果、本年度4月から2月現在まで、学校及び各学年の記事の総更新数は2000件を超え、それに対する閲覧数は10万件を超えている。また、学校評価のアンケートにおいてもWEBページを見ることで学校生活の様子が分かるとのことご意見をいただいている。特に、校外学習や宿泊を伴う学習では、ほぼリアルタイムに児童の様子が掲載できるようになり、閲覧数も1日で1000件を超える日もあった。学校教育活動の広報に一役買うことができるようになっている。



イ 通信票の電子化

昨年度より、学期末の通信票の電子化を実施している。学習の記録や出欠席数の転記等、業務の効率化に効果を見せている。

3 考察と課題

- (1) 情報機器の操作スキルは、家庭での利用度が上がってきているので低学年の児童でも比較的容易に身に付けられている。学校教育の役割として、情報化社会に対応できる情報活用能力の育成が重要であり、ここに重点を置き、活用させながら身に付けていけるよう各教科の学習活動に仕組めるよう研修を進めていきたい。
- (2) ICTは、授業の中で「こうできたらいいな」という教師の願いを今まで以上に実現可能にできるツールとして有効である。電子黒板とデジタル教科書（指導書）を組み合わせた活用の頻度が増え広がりを見せている。電子黒板の配備数に限りがあるので、各教室間で上手に調整して利用し、その効果的な学習を進めていきたいと考える。

情報教育の実践

守谷市立御所ヶ丘小学校 担当 倉持 久美子

1 はじめに

学校教育において「社会の変化に対応できる力の育成」が求められている現在、本校でも「知育部会」を中心に情報教育の推進を図っているところである。その中でも、コンピュータの効果的な活用、情報モラル教育の推進に重点をおき情報教育を進めている。

各教科・総合的な学習・道徳の時間においてコンピュータや電子黒板、書画カメラを活用した学習が定着している。低学年においては、お絵かきソフトや一人でスタディなどの操作が行えるようになっている。中学年はローマ字入力の仕方を覚えたり、インターネットを使つての調べ学習を行ったりしている。高学年の児童はコンピュータ操作に慣れており、プレゼンテーションソフトを使って文章や図でまとめることができるようになっている。

保護者や地域への情報の発信としては、ホームページの充実に全職員で取り組んでいる。また、メールマガジンシステムの登録率は100パーセントで、学校行事の連絡や不審者情報の連絡に活用されている。

2 実践

(1) 2年生 算数「かけ算」

ア 活用のねらい

- ・WEB教材（一人でスタディ）を使ってかけ算の問題を解いていくことで、コンピュータの基本操作に慣れるようにするとともに、課題を楽しく解決することができるようにする。

イ 学習の様子

- ・初めにコンピュータ室利用の約束やコンピュータの操作方法を確認した。児童は真剣に耳を傾けて学習に取り組んだ。
- ・2人1組で課題に取り組み、相談しながら答えを導き出していた。次から次に課題に挑戦し、楽しく学習することができた。

(2) 4年生 算数「分数のしくみを調べよう」

ア 活用のねらい

- ・プレゼンテーションソフトで作成したフラッシュカードを使い、既習事項の確認を行うことで、分数の理解を深められるようにする。
- ・プレゼンテーションソフトを使い、分数を数直線やビーカーの図に表して見せることで、感覚で捉えづらい分数を視覚的に捉えられるようにする。
- ・ヒントカードを提示し、作図をすることができない児童が自力解決できるようにする。

イ 学習の様子

- ・分数の既習事項（真分数・仮分数・帯分数）の確認をフラッシュカードで行ったところ、テンポ良く現れる問題に合わせて、意欲的に答えることができた。
- ・数直線やビーカーの図を使って作図の仕方を一斉指導で確認してから、分数のたし算の自力解決に入った。全員が、自分で図を書くことができた。
- ・解決の方法の話合いでは、電子黒板に書き込みをしながら説明を行った。説明の苦手な児童も数直線や図を使って説明することができ、分数のたし算の意味を視覚的に理解することができた。



(3) 5年生 総合学習「食について考えよう」

ア 活用のねらい

- ・自分のテーマについてインターネットで調べること
で、必要な情報を集めることができるようにする。
- ・プレゼンテーションソフト(パワーポイント)を使っ
てまとめたり、発表したりすることで、聞く人の興
味・関心を引くようにまとめたり、聞く人が興味・
関心を持って聞いたりすることができるようにする。

イ 学習の様子

- ・インターネットの「ウェブ」や「画像」から自分の
テーマに必要な資料を集め、パワーポイントに文章
でまとめたり、画像を貼り付けたりすることができた。
- ・友達同士でコンピュータの操作を教え合ったり、よりよい表現方法を話し合ったりする姿が見られた。



(4) 6年生 国語「未来に生かす自然のエネルギー」

ア 活用のねらい

- ・学習の始めにモデルとなるフリップを電子黒板で
提示することで、児童が学習のイメージや目標を
つかみやすいようにする。
- ・プレゼンテーションソフト(パワーポイント)を使
ってフリップを提示しながら発表を行うことで、
根拠を明らかにしながら自分の考えを表現するこ
とができるようにする。

イ 学習の様子

- ・モデルとなるフリップを教師が作り提示したとこ
ろ、単元のゴールがはっきりし、児童が意欲的に
本やインターネットの資料を読み取ったり、写真
や図・グラフを使いながらわかりやすくまとめ
たりすることができた。
- ・コンピュータでフリップを提示しながら他のグル
ープの人との意見交流会を行った。写真や図・グ
ラフを示して根拠を明確にしながら自分の意見
を述べることもできた。質問や感想などの意見の交
流も活発に行われた。



(5) 職員研修

- ・年度初めに、守谷スクールコミュニケーションのメール・ファイル室の利用方法などの確認を行った。
- ・夏休み中に、電子黒板の活用例や素材集の伝達を行った。
- ・県の ICT サポート事業を活用し、全職員で表計算ソフト (Excel) の基本操作・活用方法を研修した。

3 考察と今後の課題

児童はコンピュータの操作にだいぶ慣れており、インターネットを使った調べ学習やプレゼンテーションソフトを使ったまとめる学習に意欲的に取り組んでいる。電子黒板や書画カメラを利用した学習も児童の視覚に訴えることができ、集中度を高めることにつながっている。

今後は、電子黒板やコンピュータのより効果的な取り入れ方を研修していくとともに、情報モラル教育にも重きを置いて、道徳などに関連させながら指導していきたい。

さらに、職員の事務処理や成績処理がスムーズに行えるよう、コンピュータ研修の場を多く設けていきたい。

情報教育の実践

守谷市立郷州小学校 担当 中山 慎一

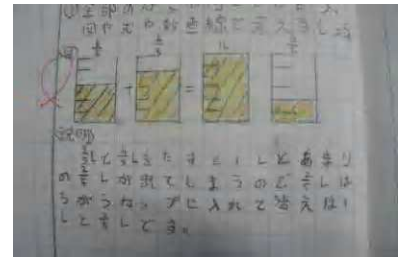
1 はじめに

本校の研究テーマは、「言語活動を充実し、豊かな表現力を育てる指導の工夫～書くこと、伝え合うことを中核として～」であり、「豊かな表現力」を育て、「伝えあう」ことで学力の向上を目指すことを一つの目標としている。本校の研究において、「伝え合うこと」において、学習効果をあげる手段として、情報教育の担うところは、大変大きいものと思われる。情報教育は、情報機器を使用することそのものを目的とするのではなく、学習を行う上での一つ的手段にとらえ、学習効果を最大限上げていくことが最大の目的である。そのためには、指導者のスキルアップはもとより、学習指導において、実際にどのような情報機器を使用し、授業のどの場面でどんな教材を使用することが効果的かという点について研究を続けてきた。

2 実践

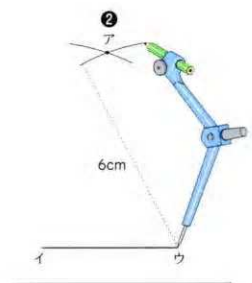
(1) 算数：分数（４年）

分数で表された２量が１を超える場合について、既習の分数の表し方をもとに考える授業である。図や言葉、数直線、言葉を使って自分なりに考えた方法を各人ノートに書いた。その方法をクラス全体に説明する際に、児童のノートを撮影し、そのカメラを電子黒板に接続し、カメラの再生機能を用いて画面に投影した。黒板に板書する場合と比較して、時間を短縮できること、操作の簡易さ、そして映像の鮮明さといった利点を考え実施することにした。その結果、自分のノートが電子黒板に写ることが児童の意欲につながるといえるよさを感じることができた。



(2) 算数：二等辺三角形の描き方（３年）

コンパスを使用して、二等辺三角形を作図する学習である。児童は、コンパスの使い方には慣れてきているが、今回のような使用は初めてであり、視覚的にプレゼンテーションソフトを利用することで、効果を上げられるものと考え実施することにした。実際には、スクリーンに投影するだけでなく、板書も併用したことで、確認しやすかったことから、ほとんどの児童が、描き方の順序を間違えずに作業することができると、予想以上に効果を上げることができた。



(3) 国語：物語をつくろう（3年）

絵を見て、そこから連想する物語を自作する单元である。導入部で、絵をプロジェクターで拡大して見せて、児童の興味関心を高めた。また、登場人物の性格についても、アニメーションで確認し、イメージ作りをすることができた。



(4) WEB コンテンツ（NHK デジタル教材）を利用した実践例

「NHK of school」の「ふしぎがいっぱい」を各单元の中で、導入や確かめ、まとめの段階で利用してきた。3年生の「太陽の動きと光のはたらき」の学習では、太陽の動きとともに影が動くことや、影が太陽の反対向きにできるという性質について動画を見ながら、実際に観察したことと比較することで、太陽の動きと影の動きの関係について、より理解を深めることができた。



(5) 情報モラルの学習について（5年 総合的な学習の時間）

総合的な学習の時間やその他の学習において、コンピュータをはじめとした情報機器を利用する機会が、学年が進むにつれて増えてきていることから、情報モラルの学習は大変重要になってきている。5年生では、「著作権」についての学習を行った。この学習では、ゲームソフトという児童の身近にあるものを題材に用いることにより、興味関心を高めることができた。また、実際に Web コンテンツを利用し、各自で情報モラルに関する問題を解いたり、関連するゲームを行うことで、さらに理解を深めることができた。



実際に Web コンテンツを利用



3 今後の課題

今年度は、情報モラルの学習に取り組む学年・学級が増え、また、コンピュータや、電子黒板、プロジェクタなどを利用する機会も増えてきた。しかし、低学年においては、I C T機器を利用する上でのスキルが十分に身に付いていないように思われる。児童のスキルアップがなければ、I C Tを十分使いこなせないであろうし、また、情報モラルの学習においても機器利用の経験が少ないことから、十分理解できないことも考えられる。できるだけ児童がコンピュータに触れ、スキルアップが図れるよう、コンピュータ室の利用時間を十分確保することが重要である。また、職員も普段の授業において、I C T機器を十分に活用できるよう、今後は、コンテンツの紹介や情報機器の利用の仕方、活用方法などについての研修を行って、様々な情報の共有化を図るようにしていきたい。

情報教育の実践

守谷市立松前台小学校 担当 中村恵子

1 はじめに

情報化社会の進歩は目まぐるしい速さで進んでいる。全校児童に「携帯電話のアンケート」を実施したところ、高学年の所持率が高いという予想通りの結果に加え、低学年においては、幼稚園の頃から自分の携帯電話を持っていたという児童が複数いることが分かった。情報モラルの指導も各学年の段階に応じ、低学年から実施していかなければいけないということを、改めて考えさせられた。

本年度も、各教科領域で積極的に情報機器の活用を図り、「情報活用能力」の育成に努めてきた。1年生からパソコンに親しみ、3年生からはローマ字入力を始め、6年間で情報活用能力を身に付けてきている。インターネットを利用した情報収集、スタディノートを活用したプレゼンテーション、学校行事など、様々な場面で教育機器を活用してきた。

2 実践例

(1) 主な授業

学年	教科・単元	活 動 内 容
1 年	国語 各単元で	・デジタルコンテンツを用い、漢字の書き順や形の確認を行った。
2 年	国語「ビーバーの大工事」 算数「三角形と四角形」	・インターネットを活用し、ビーバーについての資料を提示した。 ・課題提示をしたり児童が考え方を発表したりする際の補助としてデジタル教科書を活用した。
3 年	国語「もうどう犬の訓練」 理科「チョウを育てよう」 総合「手と心でふれあおう」	・インターネットを活用し、盲導犬についての資料を集めた。 ・デジタル教科書で、昆虫の育ち方を確認した。 ・インターネットを活用し、手話についての資料を集めた。
4 年	社会「茨城県について知ろう」 総合「身近な水環境を調べよう」	・インターネットを使い、茨城県の特徴を調べた。 ・スタディノートの機能を生かし、一人一人が調べたことの発表を行った。
5 年	社会「わたしたちの国土」	・建物の様子を提示し、寒い地方、暖かい地方の特徴をつかむ活動に役立てた。
6 年	理科「月や星のうごき」 総合「情報モラル」	・デジタル教科書を利用し、実験結果の確認・補足を行った。 ・パソコンソフト「あんしん・あんぜん情報モラル」を使って、「携帯電話の使い方」についての授業を行った。
全 学 年	理科「金環日食のしくみ」 	・金環日食の観察をする前に、電子黒板を活用して観察の際に注意すること、金環日食のしくみなどについての説明会を行った。

(2) 委員会活動

委員会活動でも電子黒板を積極的に活用した取り組みを行った。目の愛護デーにちなんだ「G O G O ウォッチング週間」では、電子黒板に資料を映し出し、委員会の児童が資料を指し示しながら説明を行う場を設けた。児童のプレゼンテーション能力も身に付いてきている。

(3) パソコンクラブの活動

「スタディノート」や「ジャストスマイル」を利用し、自己紹介カードやメッセージカード作りを行った。作品は掲示することを前提に作り、見た人が不快に思う書き方をしないなど、情報モラルを意識した指導をした。

(4) 学校ホームページの活用

学校ホームページは、全職員が協力し、記事の作成や更新を行っている。たくさんのアクセスがあり、地域の方々からの関心が高いことが分かる。見やすく、興味をもって閲覧してもらえるようデザインの変更を行っている途中である。新年度には新ホームページを披露する予定で取り組みを進めている。

(5) 情報モラル教育の実施

6年生の情報教育では、携帯電話に関する情報モラル教育を行った。インターネットには見てはいけないページやトラブルに巻き込まれるページ、信憑性が疑わしいページがあることを学習し、インターネットの危険性について理解することができた。また、高学年になり携帯電話の所持率が上がってきていることを受け、中学校に進学する前に、最低限の危険回避の方法やルールを身に付けることもできた。PTA授業参観日は、保護者向けの「携帯電話の使い方講演会」を実施するなど、外部講師を迎え、携帯電話の危険性についての講演会を行い理解を深めることができた。児童の携帯電話の使い方に関心をもち、携帯電話の使い方の約束事などを確認する良い機会となった。

(6) 校内研修での活用

電子黒板に児童の顔写真を写し出し、配慮を要する児童への支援会議を行った。児童の顔写真を写し出して話し合い、職員が名前と顔を一致させられるようにした。登下校の指導や縦割り活動を実施する際にも役立てることができた。また、人権教育の研修では、電子黒板に研修用のビデオを映し出し、共通理解を図ることができた。

(7) 職員研修

夏季休業中の校内研修を利用し、「もりやスクールコミュニケーション」の使用方法について理解を深めることができた。また、情報を共有することで校務を軽減できるように校内ネットワークの利用法を研修した。

3 実践についての考察

- ・インターネットからとった資料を活用したり I C T 機器を使用したりすることで、児童が、情報を得る様々な方法を知り、それを活用することに抵抗なく取り組めるようになった。
- ・携帯電話やインターネットの利用が多くなるにつれて、情報モラルの必要性が高まっている。計画的に学習を進める必要があることが分かった。

4 課題

- ・情報モラルや I C T 教育に関して使用頻度や活用の幅に差があるので、研修を通してその有用性や必要性の共通理解を図っていく。
- ・今以上に積極的にホームページの作成・更新を行い、保護者や地域の方々に学校の情報を発信し、学校の取り組みを理解してもらえるようにしていく。

情報教育の実践

守谷市立松ヶ丘小学校 担当 松信 勝彦

1 はじめに

本校では、各学級へのノートパソコンや各階への電子黒板が配置されており、これらのICT機器を活用しながら教育活動全般での情報化が進められている。また、学校ホームページの充実にも努め、学年毎に学校での生活の様子などを保護者や地域に発信している。メールマガジンも9割近くの保護者が登録しており、緊急の連絡や学習ボランティア等への連絡に活用している。また、会議でのペーパーレス化の面で守谷スクールコミュニケーションを活用している。

2 実践

(1) 授業でのICT活用

○電子黒板の活用

電子黒板の活用の仕方には、①大型モニターとしての活用。②インターネット上の動画、デジタルコンテンツの視聴。③タッチセンサーを使った各種ソフトの活用の3種類がある。①では、職員室に導入された総合複合機によってスキャンした画像を校内LANを通して各教室で見ることができるようになったことで、電子黒板の活用数が増えた。

①の大型モニターとしての活用は、国語・算数・社会・理科・体育・道徳・総合的な学習の時間など、多くの教科・領域で使用されてきた。特に、道徳教育においては、題材に関係する参考資料を大きな画面に提示することで、イメージを児童にしっかりと持たせることができた。(図1)1年生の「子犬が生まれた。」という題材では、実際に出産直後の子犬を見ることはできなくても、画面でその様子を見ることで生命の神秘さや場の雰囲気を感じとらせることができた。



図1 道徳教育から

理科では、4年生の「すがたをかえる水」の学習で、実験結果の値をパソコンに入力し、それが折れ線グラフとして画面に現れることで、他の班との結果の比較ができ、熱した水の変化や特徴を捉えることができた。(図2)6年生の総合的な学習の時間では、修学旅行の事前調査の発表と5年生への報告会に電子黒板が活用された。(図3)



図2 4年 理科

②の動画やデジタルコンテンツの視聴は、理科の生き物や月・星座の観察の学習で活用された。予定していた日の気象条件が悪くて観察ができないときでも、動画を視聴することで変化を学ぶことができ、後日、観察結果と比較をし、差がないことで自分の観察方法に間違いがないという自信を持たせることが

できた。体育では、ソフトバレーボールの動画でゲームの進め方を学び、器械運動(鉄棒・マット・跳び箱)の動画やアニメーションでは、担任ではできない運動の動きを繰り返したり、スローで見たりして学習することができた。③の画面をタッチすることで操作ができるという機能は、児童の自分の考えを自由に表現するのに、大いに役立っている。算数の図形の書き方で、画面を触りながらペンを動かすと線が引けたり、分度器を動かして角度を測ったりし、何度でもやり直しができることが児童の学習への興味・関心を高めさせていた。



図3 6年 総合的な学習の時間

○スタディノートの活用

スタディノートも新機能を生かした学習が行われた。総合的な学習の時間では、一人一人が制作したノートをリーダーに送信して一つのノートにしたり、ポスター機能を使って記事を分担したりしながら作品作りを行った。また、できあがった作品を掲示板に掲示することでお互いの作品に対するコメントを送るという活動も行われた。

(2) 学校ホームページの充実

松ケ丘小学校では、ホームページを今年度リニューアルした。形式もブログ形式に変更し、更新が容易にできるようにし、子ども達の日々の様子を積極的に発信している。メインページには、行事だけではなく、インフルエンザなどの対応や授業の様子や休み時間など、子ども達の生き生きとした姿を知る手段として保護者からの評価も得ている。

3 考察

I C T機器を活用することで、学習活動の幅が広がり、児童が意欲的に学習に取り組む姿が見られた。特に電子黒板は、学校教育の様々な場面でその効果を得ることができた。授業では、導入部分で学習への意欲を喚起させ、展開では児童の思考を深めさせる資料提示や学習の進め方の確認の方法等として、学習内容の深化に役立っている。また、オープンスペースに電子黒板を設置し、児童がソフトを使って学習内容の復習が行えるような場の設定をすることで学習内容の定着を図ることができると考える。

4 今後の課題

学校教育の中でI C T機器の活用は増えてくると思われるが、これまで各教師が電子黒板で使用した資料・教材などをどのような形で共有化していくか、学習で活用できるデジタルコンテンツの蓄積と共有が課題と言える。また、教師側も使用する頻度に違いがあり、機器設置の煩わしさやトラブル時の対処方法等のハード面での問題と「どのような教科で」、「どのように使っていけるのか分からない。」といったソフト面の問題解決を行い、その差を縮めていくことが必要であると考ええる。

情報教育の実践

守谷市立守谷中学校 担当 黒井孝広

1 はじめに

本校の組織目標の一つに「分かる授業づくり」が挙げられている。生徒一人一人に確かな学力を身に付けさせるためには、一時間の授業の中で「分かった」「できた」という体験を多く積ませることが必要である。そのために情報教育においてどのようなアプローチができるのであろうか。本校における数多くの授業実践をもとに考えていきたい。

2 実践

(1) 分かりやすい指示・説明のために ～国語科・数学科の実践～

国語科では授業の中で「書画カメラ」を活用している。右の写真は、書画カメラと電子黒板を用いて、本時で使用するワークシートの書き方について説明している場面である。物語文における登場人物の心情の変化をグラフにして表す学習に初めて取り組む生徒も多かったため、このようにして拡大しながら実際にやってみせることで、たいへんスムーズに学習活動を展開することができた。

さらに、生徒の書いた考えをすぐに拡大して映し出すことができるのも、書画カメラの利点である。手本となる生徒の考えや作品を参考にして、意欲的に取り組む姿が見られた。

数学科では電子黒板の「ペンツール」を活用した授業実践が見られた。図形の性質について考える際に、補助線を引くことがあるが、慣れていない生徒にとっては、大きな負担である。教師が実際に電子黒板上でやってみせることで、補助線を使うことの利点に気付くことができた。本時では、T2が黒板に学習内容を板書し、T1が電子黒板を用いて説明を行った。チームティーチングの重要性が増している中、電子黒板も本時では3人目の教師として活用されている。



(2) 作品の鑑賞を行うためのツールとして ～美術科の実践～

電子黒板を使う際の問題点として、画面が小さいことが挙げられることがある。美術科では鑑賞の時間にコンピュータ室の大きなスクリーンに芸術作品を映し出して学習活動を展開した。

本時はゴッホの作品と日本の芸術作品をスクリーンに並べて映し出すことで、二つの作品に見られる共通性に気付くとともに、ゴッホが日本の芸術作品から大きな影響を受けていたことを学ぶことができた。



(3) 観察・実験活動を効果的に行うために ～理科の実践～

右の写真は、マツの花を観察する学習活動において、スクリーンに花のつくりの模式図を映し出している様子である。本時ではマツの花の観察をしたが、前時で観察した別の種類の花の写真と並べて表示することで、それぞれの花における共通点と相違点を効果的に見出すことができた。

本校では、理科を含めて3つの教科でデジタル教科書を導入することができた。特に理科においては、動画などを効果的に活用し、観察や実験の方法を生徒に分かりやすく説明することができるので、今後さらなる活用を目指していきたい。

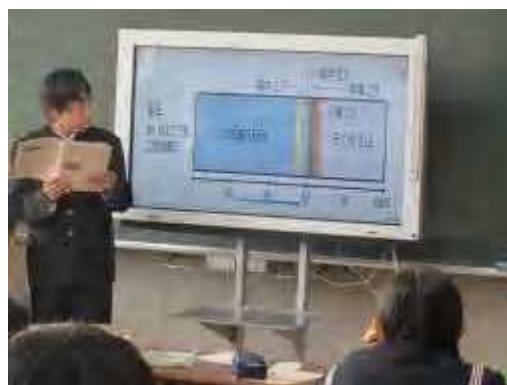


(4) 生徒の情報活用能力の育成のために ～社会科の実践～

地理の学習ではたくさんの資料を扱うことが多い。それらの資料を活用して、各地域における地域的特色を捉えていくことが社会科の学習における大切な目標の一つである。

右の写真は、プレゼンテーションソフトを使って北海道地方の地域的特色について発表をしている場面である。教師が学習内容を説明する際に、スライドショーを作成して行うことは多く見られる。今回は、教科書に掲載されている写真やグラフを一枚一枚のスライドにし、発表原稿を生徒に作成させることにした。このようにして生徒の資料活用能力を育成することを目指している。

人前で発表をする際に、聞き手に向かって話することが難しいといった課題が見られる。前に取り上げた国語科の実践においては、電子黒板を用いて発表をさせながら、生徒のプレゼンテーション能力を育成していくこともねらいとしている。このような活動を各教科、領域において繰り返し行っていくことで、大勢の人の前でも堂々と発表することのきる生徒が増えていくことが期待される。



4 成果と今後の課題

これまでに紹介してきた実践は、どれも「分かる授業づくり」を目指して行われているものである。今年度は校内研修において情報機器を活用した公開授業、研究協議を行ってきた。授業以外の場面では、交通安全指導を行う際に、正門前の交差点の様子を体育館のスクリーンに大きく映し出して注意を喚起した。自動車側の視点で撮影した写真を見た生徒は真剣な表情で話を聞いていた。

電子黒板をはじめとして数多くの情報機器を活用していく際に重要なのは、機器の利用そのものが目的ではなく、生徒の確かな学力を身に付けさせるための手段であることを念頭に置くことである。今後も生徒一人一人にどんな力をつけたいのかを考慮しながら、さらに効果的な活用方法について模索していきたい。

情 報 教 育 の 実 践

守谷市立愛宕中学校 担当 本多 紀之

1 はじめに

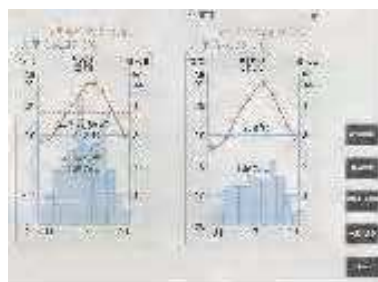
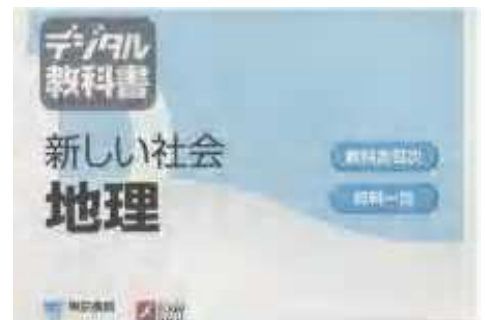
今、時代にあわせて学校にハードが導入され、その性能も向上している。各教科でデジタル教科書やスカイメニュー、スタディーノートなども導入され、ソフト面の有効活用が求められている。新しい機器や教材が学校に導入され、本校では様々な教科、領域で視聴覚機器の活用が図られている。今回はその様子を中心に紹介したい。

2 実践

授業においては、教材提示を中心に電子黒板、プロジェクターの活用が目立つ。電子黒板は画面を見ながらタッチパネル機能が使用できるので、より動きのある教材提示や説明、あるいは授業のまとめが行える。プロジェクターは、対象をより大きく映すことができるので、生徒に大きく提示したいときには有効である。

まず社会科での活用の様子を紹介する。社会科では、デジタル教科書の教材の提示に電子黒板を活用した。

2年生「日本の諸地域」の学習では、教科書に載っている地図を拡大して提示し、自然地形名や地形の特徴を一斉におさえることができた。気候の学習を行う際にもコンテンツ資料を活用した。雨温図のグラフを動かしながら生徒に提示することや、他地域の雨温図と比較し、気温や降水量の特徴をおさえることができた。多くの動画コンテンツもあるため、生徒に興味・関心を持たせたり、知識をさらに深めたりする上でとても有効であると考えている。



歴史の学習では、スライドで資料を提示するだけでなく、NHKの動画コンテンツを活用した。「NHK for school」というページには社会以外にも様々なコンテンツが用意されている。今年度は特にその中の「NHK デジタル教材」を活用した。

このコンテンツは、各教科書に対応しており、学校で使っている教科書を選択すると単元に対応した動画クリップの目次が表示される。クリップを選択するとあらすじと画面が表示される。クリップの内容は2分程度となっており授業中に複数生徒に提示することも可能である。歴史事象を学習する上では、いかに生徒に興味関心を持たせるかが課題である。クリップや動画は生徒に興味関心を持たせる上でとても有効であると考えている。



以下では、社会科以外での情報機器の活用事例を一部ではあるが紹介したい。

国語科では、デジタル教科書の本文を電子黒板に映しだし、タッチパネルの機能を使いながら、文章の構成や要点のとらえ方の学習に活用した。また、書写の時間には、書き順や筆づかいなどをおさえながら、教師の動きある手本を生徒に示すことができた。

数学科では、図形や立体の学習でデジタル教科書のコンテンツを活用した。面積や体積の変化や図形を動かしながら説明をするために、電子黒板を活用した。タッチパネルの機能を活用し、文章問題の内容を理解できるようにした。

理科では、どの単元でもコンテンツの写真を活用しながら学習を進めた。また音の学習では、音の解析を行い、生徒が視覚で理解することができるよう工夫した。

英語では、発音検定を行うときにPC室を活用した。また、対話文の学習で、会話を電子黒板に写しながら理解を深めた。

技術科では、プロジェクターと実物投影機をつなぎ、生徒の作品を紹介する活動に使用した。また、スライドづくりやプログラム学習でPCを活用した。

保健体育科では、DVDの映像を生徒に提示する際、プロジェクターを活用した。このように本校では各教科の学習内容にあわせてより効果的に学習が進められるように、情報機器の使用が日常的に行われている。

3 考察と今後の課題

昨年度にスタディーノートの研修を行ったにもかかわらず、授業での活用が見られなかった。教師が授業で活用することに慣れていないことが原因であると考えられる。今後、このソフトを活用し、互いに評価しあうスタイルの学習や、読解力、表現力の育成を図るために、電子メールや電子掲示板、データベース機能の活用などに関して研修が必要であると考ええる。

情報機器の管理担当者として、校内でのICT促進のために、各教科担当者が使いたいときに使いやすいよう整備することも心がけていきたい。

情 報 教 育

守谷市立けやき台中学校 担当 土田 富夫

1 はじめに

今年度は教員の異動が多く、機器の存在や保管場所の確認も大変でした。

不特定多数の人に情報を送ることができるようになった今、情報モラルについての学習も技術科を中心に、計画的・組織的にやってもらうことにした。

しかし、いつもながら学校教育における情報教育は、情報機器の利用だけに終わりがちのところがあり、利用者の内面の充実が要求されている。

いろいろな教育場面において、様々な視聴覚機器の利用や、記録や検索としてのコンピュータやインターネットの効果的な活用を進めるための環境を整備していくことが必要となってきた。

メルマガの使用に伴い、緊急連絡等の情報を発信することも容易になり、学校公開の一手段としても利用することが可能となったので、随時研修を行って職員の利用を促した。

2 実践 ～研究発表会を中心に、ICT機器の利用と表現活動の充実～

本校は、11月に市教研指定の研究発表会が本校で行われ、指導・展開の工夫・改善をめざし、ICT機器を各教科で有効活用した。コンピュータ室のパソコンに英語の発音力アップソフトが導入され、新しい授業のあり方について無限の可能性が広がりつつある。

コンピュータ室だけでなく、学校内のどの教室でもインターネットを利用し、資料を提示したりファイルの共有をしたりした。

今年は部活毎に、メルマガによる活動予定やその変更のお知らせの活用も多くなった。また、学校ニュースや各学年ごとに活動の様子をホームページにのせることが多くなり、更新回数も増えた。

学校行事はもちろん各種大会についても、結果や活動の様子を携帯で送ってホームページに載せるなど即時性を高めた。

このような活動がスムーズにできるよう、次の2つの点を重点的に実践を行った。

(1) ICT機器を活用するための職員研修の充実

日付	研 修 形 態	主 な 研 修 内 容
4月3日	年度初め研修	・異動した職員を含め、共通理解事項の確認とコンピュータの割り当てについて
4月下旬	プリント物の配付	・情報教育校内研修～セキュリティについて～
5月	随時研修	・校内LANの利用の仕方
7月31日	夏季職員研修	・コンピュータ室の利用の仕方について
随時	職員研修	・メルマガの登録方法の仕方等
	一斉研修	・ICT機器の紹介と利用の仕方
	個別	・指導要録の電子化について
		・ホームページ更新の仕方等
		・個人情報の取り扱い等
		・ICT機器のいろいろな利用の仕方

(2) 情報教育における授業実践例 ～コンピュータの教育活動への積極的活用～

○ 第1学年での活用例

総合的な学習の時間の中では、「守谷の歴史について」、インターネットでの情報収集を行った。

社会科では、w e b 検索で歴史上の人物や出来事、各地の地理的データの調べに利用した。

理科では、電子黒板を用いて観察・実験結果を提示してみせたり、資料をインターネットから探して提示するのに活用した。

技術科では、インターネットを使って事象について調べたり、無料コンテンツによる学習を展開した。

国語科では、古典を中心に文章を電子黒板やプロジェクターを利用して、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いにみんなで直したり、作品にまつわる映像の提示を行ったりした。

○ 第2学年での活用事例

総合的な学習の時間や理科及び社会科において、情報収集したり、「調べ学習」の結果をまとめたり、まとめの学習を個々のスピードに合わせたりした授業を展開した。

技術科では、簡単なプログラミングの学習をし、あわせて情報モラルについても学んだ。

上級学校の調べ学習では、いろいろな学校の特色や指導方針の確認等に利用した。また、東京校外学習の事前準備として、公共交通機関のネットワーク状況や見学先の詳細を調べたりした。

○ 第3学年での活用事例

総合的な学習の時間や技術・家庭科などで「ワード」を使いレポートを作成した。

家庭科の保育実習では、実習したことをA4用紙1枚にまとめた。資料としては、デジカメで撮った写真を活用した。全員自分なりの考えや感想をまとめた。あわせて著作権や肖像権についても触れた。E x c e l の表計算についても学習した。

理科では、「天体の動き」等をw e b で検索し、その様子を電子黒板で拡大提示しながら説明したり、まとめたりするのに利用した。

国語科では、文章をスクリーン等に提示して全員で考え、作品にまつわる資料を提示した。

数学科では、w e b サイトにのっている問題を紹介した。

3 考察及び今後の課題

利用したいと思っているI C T機器は各職員それぞれあるのだが、購入が難しかったり、一度きりの利用におわったり、管理に難があったりと、毎年対応が難しく思う次第である。

コンピュータ室の利用が多く、特に社会、技術家庭での利用が目立った。また、電子黒板やプロジェクター、デジカメ等を活用する回数が増え、譲り合う場面が増えてきた。

体育での利用も考えると、体育館や武道館にも校内L A Nの設置の必要性を感じた。

ダンスや柔道といった指導にも、模範運動を提示することができ、技術の向上に役立つと思う。

ソフトの利用技術はもちろんのこと、パソコン本体やデータの管理に関する研修の重要性も痛感した。

今後とも、生徒が様々な学習活動の中でコンピュータを利用する場面を設定し、情報の提示はもちろん、情報収集力や情報管理能力を高める指導を行ったり、情報モラルの学習についても指導計画に位置づけ、さらに充実させていく必要がある。